

谷口研究室

1989年度年間活動報告書

Vol. 7

甲南大学文学部



丸木位里・俊 画

谷口研究室
1989年度活動報告書

Vol. 7

甲南大学文学部

目次

卷頭言	谷口 文章	1
Ⅰ. 第十八回ゼミナール合宿（春季）		
1. 日程		4
2. 解説：エンカウンター・グループについて	谷口 文章	5
3. エンカウンター・グループ実習		
エンカウンター・グループの理論と体験	石野 清美	6
エンカウンター・グループについて考える	小竹代里子	9
実生活とエンカウンター・グループ	天野 雅夫	11
エンカウンター・グループについて思うこと	山本たまみ	14
エンカウンター・グループの報告と考察	辻 啓之	16
4. アンケート		19
Ⅱ. 第十九回ゼミナール合宿（夏季）		
1. 日程		24
2. 解説：夏合宿研修旅行	谷口 文章	26
3. 研修レポート		
合理性に隠蔽されてしまったもの	阿部 哲也	28
夏合宿私見	深谷 昌生	30
ゼミ合宿を終えて	光石 好雄	32
私達の未来とは	松本 昌樹	34
「生きるか死ぬか」の問題	辻 孝司	36
反・現代社会	小西 克弥	38
霜里農園を訪れて	上田 雅美	40
人間と自然の関係について	村松 圭吾	42
有機農法をこの目で見て	前田 拓志	43
現代人の課題	秋山 美紀	45
転換期を迎えて～現代の原子力について～	川野三佐子	46
『危険な話』『ヒロシマノート』を読んで	村嶋 務	48
過ぎた夏に	平岡 未央	50
生命の事実を知ること～丸木美術館を訪れて～	井垣 博美	52
にんじんとトマト	北村 光子	56
4. ゼミ合宿運営後記	阿部 哲也	58
Ⅲ. 第六回深層心理研究会公開講座		
1. 深層心理研究会・公開講座の報告	谷口 文章	62
2. アンケート		65

3. レポート			
医療の神話について	平岡	未央	69
医療と人間性	松本	昌樹	70
講演を聞いての感想	高木	浩美	72
IV. 学園生活の一風景			
1. 講義「イメージ・トレーニング」			
1990年度「イメージ・トレーニング」講義内容	谷口	文章	76
講義「イメージ・トレーニング」の感想			85
2. 一般教養講義「哲学」の講義の一コマ～〔VTR〕			
星野富広「かぎりなくやさしい日々のために」の感想～			89
3. 1989年・谷口ゼミ卒業旅行運営後記	深谷	昌生	92
V. 環境問題を訴え続けて			95
VI. 修士論文、卒業論文、研究生論文、ゼミ論			
1. 修士論文			
Development of the Tagging Counter for Heavy Ions			
	岩田	哲郎	100
2. 卒業論文			
心象の中の賢治	榎本	修一	105
環境生物試料中のセレンの分析	西村	由美	108
Drift Chamber による荷電粒子の飛跡の解析	深谷	昌生	111
3. 研究生論文			
ミシェル・フーコーの流儀～セクシュアリテをめぐる考察～	田中	素子	114
4. ゼミ論			
『人間の学としての倫理学』を読んで	天野	雅夫	119
「無意識」についての深層心理学的考察	辻	啓之	121
VII. 甲南大学総合研究所			
1. 総合研究所所報			126
2. 発表要旨			128
3. 研究発表			
実態論をめぐる合理主義と非合理主義の諸問題			
～「人間の深層心理と社会の深層構造」への序説～	谷口	文章	132
ハーマン・メルヴィルの反合理主義精神	谷本	泰三	132
文学作品のイメージをめぐって	寺島	樵一	135
経済学における非合理的要因について			
～一般均衡学説を中心に（試論）～	永友	育雄	136

異文化としての分裂病～一症例を通して～	杉林 稔	140
人間学的精神医学における人間観		
～V.E.フランクルのロゴセラピーをめぐって～	小谷 英子	142
VIII. 研究室活動内容		
1. 講義概要		150
2. 活動記録		152
編集後記		154

巻頭言

甲南大学 文学部助教授 谷口 文章

本年度は、多忙で充実した一年でした。四回生は、それぞれの希望の所に就職し、また進学を決めました。三月末には卒業生の三カップルが新しい家庭をもち、新たなる人生に出発されました。彼らすべてに良き人生が訪れることを願っております。

本年度四月から甲南大学総合研究所の「人間の深層心理と社会の深層構造」という研究会を結成し、従来半年に一回であった公開講座をいわば月に一回行うことになりました。これも、自宅で七年前から月一回のフロイト研究会の延長上にあることを考えれば感無量です。研究員の先生方は、心理学、文学、経済学、医学、哲学の関係の方々に、すでに一年が経ち充実したものとなっております。個人と社会における“見えざるもの”を明らかにするため、学際的な立場から多層文化論の展開がなされております。

また、この十年間に研究していました催眠法も、「イメージ・トレーニング」という専門科目の中で講義することになり、その成果は本報告書の中で詳細に紹介してあります。

ところで、深層心理研究会の第六回公開講座では、総合研究所の「人間の深層心理と社会の深層構造」の研究会と合同の形で中川米造先生に“医療の神話”という題目でお話していただきました。総研の研究員でもある中川先生には、いつもながら啓発されることが多く、また、お人柄にはゼミ生も傾倒している次第です。ありがとうございました。

さらに夏の研修旅行では、哲学が現実に対してどれほど有効性をもつかという従来の問題意識の下で、原爆の図で著名な丸木位里・俊両先生を訪れ、忘却の彼方に葬り去られようとしている戦争の悲惨さ、そしてそれと同じ発想が原子力発電の問題に直結して現代の公害・環境汚染の原因の一つになっていることを改めて確認し、深く考えさせられました。丸木美術館を訪問する前日には、有機農業の実践家金子美登氏の霜里農園を訪れ、その生命に根づいた生活に触れることができました。原爆の図と有機農業、一見すると全く関係がないかのようにですが、実のところ両者ともに人間本来のあり方に気づかされる点に共通のルーツがあります。それも丸木両先生、金子御夫妻の生き方の純粹さによるものであると思われまふ。夏の研修旅行を充実した有意義なものにして下さった皆様に心より感謝申し上げます。特に丸木御夫妻には、本報告書の扉を飾っております母子像をやさしく包む平和の鳩の絵を御恵与賜りましたことを申し添えておきます。

このような充実した研究室活動も、ひとえにゼミ生の一致団結のお

陰と思います。この一年ゼミ幹事の辻啓之、補佐の阿部哲也、上田雅美、記録係の天野雅夫、小西克弥、村松圭吾、辻孝司の諸君、また彼らを支えてくれたゼミ生全員に感謝致します。

後輩の皆さん、来年度も忙しくなりそうです。先輩に元気よく続いて下さい。

(1990,3.31.記)



1989年度ゼミ構成員

I

第十八回ゼミナール合宿（春季）

第18回ゼミナール合宿研究発表会のお知らせ

私たち谷口ゼミナールでは、1年間の成果を発表する恒例のゼミ合宿の日程を下記の通り計画しています。皆様の御参加をお待ち申し上げます。

甲南大学 文学部 谷口研究室
1989年2月20日

記

- 目的： 卒業論文発表及びエンカウンター・グループ実習
講演： 谷口 文章先生「ミヒャエル・エンデにおけるファンタジー界についての哲学的分析」
- 日時： 3月13日（月）～3月15日（水）
宿泊地： 関西地区大学セミナーハウス
神戸市北区道場町生野字ログゴ318-2
☎ (07956)4-4391
- 集合場所： JR宝塚駅 改札口 午前11時半集合
費用： 15000円、そのうち5000円を前金としてお送り下さい。
研究文献： 心理系： ロジャース『エンカウンター・グループ』（創元社）
- 参考文献： 哲学系： 広松 涉『新哲学入門』（岩波新書）
教養系： M・エンデ『モモ』『果てしない物語』（各、岩波書店）
- 申込方法： 申し込み用紙に前金を添えて、2月20日（月）までに下記へお送り下さい。
☎563 池田市荘園1-10-21 西村 由美
- 問い合わせ： ゼミ合宿幹事
西村 由美 ☎ (0727)61-2169
辻 啓之 ☎ (075)931-3806
谷口 文章先生 ☎ (07712)3-9464

春合宿（於、関西地区大学セミナーハウス）では、第三回目のエンカウンター・グループが行われた。人間の個としてのカウンセリングは、深層的な内面に直接触れていくが、社会における個としてのエンカウンター・グループのワーク・ショップは視角が相違する。人間としての個の確立を確認するために平素理論面からの哲学や心理学の基礎訓練をしているのであるが、その成果を自覚する方法として、社会における自らの立場を省みることを経験することも時には必要であろうと思われる。

ただ、今までの二回のエンカウンター・グループと違って、今回は大多数がお互いに顔見知りのグループであったため、少々トーンが相違していたかも知れない。しかし、グループ後の感想の多くは、自らを客観視できたようである。さらに、どのような影響があったかのアンケートもとってみた。

ゼミ生同士のエンカウンター・グループは、お互いの性格をすでに知っているため、ワークショップにおける本来的動きが出にくいかも知れないため、次回から「交流分析」という新しい手法に切り換えることも考えてみたかと思っている。



エンカウンター・グループ実習

エンカウンター・グループの理論と体験

甲南大学 OG 石野 清美

1. グループの歴史とロジャーズの理論

私たちは、人間関係を自分の思い込みや価値観で見がちである。1950年代のアメリカのヒューマニスティック心理学の発展の中で、人間関係におけるありのままのダイナミクスを観察する目を養おうとする考え方が、人間関係訓練の手法として注目されていた。

レヴィン(K. Lewin, 1890-1947)の考えを発展させたTグループが初めて開かれたのと同じ頃、ロジャーズ(C. Rogers, 1902-1987)はカウンセラー養成に集中的グループを役立てようと試みていた。Tグループが産業界での円滑な人間関係を第一目的としたのに対し、このロジャーズのシカゴ・グループは自分自身をよく理解するという個人の成長を目指した。

エンカウンター・グループについて言及する前に、まずロジャーズの唱えた来談者中心療法と治療態度をまとめてみたい。彼は、『カウンセリングとサイコセラピー』において、治療者が指示的能動的態度で来談者に働きかける方法を批判し、来談者自らの成長していく力を全面的に信頼し非指示的態度で関わる方法を提唱した。また、『治療的变化に必要な十分な諸条件』の中では、来談者の成長しようとする力を援助する治療者の条件を次のように明確にした。治療者側の基本的条件の第一は、“治療者の純粋性”である。「個人的成長は治療者がありのままの自分であるときに促進される」と彼が言うように、治療者自身がありのままを来談者に映して初めて、来談者はありのままに直面することができる。第二の条件は、“無条件の尊重(肯定的配慮)”である。来談者の成長を促進するには治療者の「暖かく肯定的で受容的な態度」が必要である。第三の条件は“共感的理解”を挙げている。「全く私的な個人的意味をもつ来談者の内的世界をあたかも自分のもののように感知し、“あたかも自分のもののようなas if”という特質を失わないこと」が共感である。このような治療者の三つの基本的条件に対して、来訪者側のもので“知覚”といわれる条件を対置する。これは、来談者が治療者の三つの態度を少しでも“知覚”し感じるときにこそ成長が起こるという意味である。これらの基本的条件の研究は、ハルキイズによって態度の条件と治療の成功ケースとの相関が実証され、裏付けされた。

彼の理論は、非指示的療法から来談者中心療法へ、後に体験過程療

法へと発展し、それらは次々と実証的検証をなされた。では、1960年代半ば以降、彼が個人セラピーをやめて専念したといわれる“エンカウounter・グループ”へ、これらの理論はどのように結びついたのでろうか。

2. エンカウounter・グループとは

さて、エンカウounter・グループ（以下グループと略す）は、「基本的出会いグループ」とも言われ、「経験の過程を通して個人の成長、個人間のコミュニケーションおよび対人関係の発展と改善の促進」を強調する。普通グループ発展 8~10人で構成され、1~2人のファシリテーターと呼ばれる世話人が自由で開かれた雰囲気をもつ。場面構成のないのが特徴で、まず自分たちに与えられた時間をどのように使うかといった問題に直面する。多くの場合、グループは最初不気味な沈黙や礼儀正しい会話から始まる。次第に表向きではあるが自己を語り始め、過去の感情や否定的感情を表明していく。そして、これらの感情がグループに受け容れられた段階で信頼感、仲間意識が芽ばえ、グループ内に援助的な動き（治癒力）が見られるようになる。さらに発展すると本当に基本的出会いが起こる。最も発展したグループでは身振りや話し声の行動の変化が見られ、ありのままの姿で出会うようになると言われている。

3. グループ経験とその個人的意味

筆者はこれまで心理療法は極めて個人的な心の問題を解決するのにより役立つ手法ととらえ、グループは人間関係のトレーニングや治療後のリハビリテーションに効果的なものと考えていた。そのためグループ経験が心の成長に効果的に働きかける部分は、心理療法に比べて心の中でも比較的表層部分ではないかという先入観を持っていた。もう少し述べると、グループに参加したという経験が、個人の人格の変容や成長に影響を与えることはあっても、それを自律的に促すレベルには至らないのではないかと考えていた。

そこで、改めて“グループ経験は個人にどのような意味をもたらすのか”について考察してみることにする。ロジャーズは「グループの発展過程は、“成長”についてまわる動揺と困難を伴う苦痛なものに違いない」と認めたとあって、「（グループ経験）それ自体が目的ではなく、グループ後の行動に影響を与えることが基本的に重要であると思う」と述べている。グループを経験した人の感想を聞くと、「自分で自分を認めることができるようになった」「他人の意見に左右されない自分の判断の基準を自分の中に見出した」「自分が好きになった」、「“今、ここ”での感情を言うことで、それまでいかに想像で考えて話していたかに気付いた」という言葉が返ってくる。残念ながら筆者のわずかな体験（今から7年前の1983年、心理学系講義の集中訓練として参加）ではこのような感想をもつに至らなかったが、これらの感想は筆者の先入観に大きな示唆を与えてくれた。

グループのメンバー、すなわち“複数の他者”が互いにひとつの“時間”、“場”を共有することで、意図せずに自然に“仲間”に変わる。その暖かさに触れると、今まで誰にも言えなかった自分の弱点や醜い部分をありのままに投げ出す勇気が湧いてくる。まさに「我—汝」の関係性を、ロジャーズは「基本的出会い」という言葉で語ったのではないだろうか。それまでの人間関係の中では殻に隠していた孤独感といった感情も、この「我—汝」間では自然に表出し、そして「ひとりではない」と感じ、癒されていくのであろう。ありのままの自分がグループで受けとめられることによって認めたくない自分もすべて丸ごと受け容れ、納得していくことが可能になる。この一連の流れが心の成長そのものではないだろうか。そして、最も強調したい点は、グループ経験によって自分が「変わったなあ」と思うその感情こそが成長へのエネルギーであって、そのエネルギーが、グループ以外の場での人間関係に大いに生かされているのではないかという点である。このように考えると、グループは一時的な人間関係トレーニングの場にとどまらず、心理的成長や精神の健康性を促すという心理療法的側面を持つのではないかと考えられる。

4. 今後の課題

そこで、今後の課題として、先に述べた側面を満足させるグループを目指すために、必要なことを筆者の体験から述べてみたい。まず、第一には参加者の動機づけを明確にすることである。例えば、何かの資格・あるいは講義の単位取得のみを目的に参加する人と、グループに心理的救いや人格の成長を求めて参加する人とは動機が違いすぎるのは言うまでもない。また、明らかに精神病の発病の危険性のある人には参加を断る勇気も必要であろう。ある程度同じ目的を持った参加者で構成することが、グループの自立的な発展を促進させる要因と思われる。第二には言葉の問題である。ファシリテーターが「今、ここ」での感情を言ってみてください」と促す、その言葉は非日常的なため、メンバーは逆に自分の言葉を語りにくいのではないかと思われる。グループのなかでも特別な言い回しを意識せず、日常の会話言葉で良いのではないかと考える。また、日本人は、普通集団の中では、主語“わたしは”をつけて話す習慣があまりない。日本語と英語の構造的な違いは当然あるが、そこから生まれる文化の差異は無視し得ないと思われる。グループでの感情表出の言葉も、アメリカと日本ではそれぞれ特徴があるのではないだろうか。

ロジャーズの理論はすべて人間と人間の基本的な出会い、対等の出会いの追求といっても過言ではない。それは人間愛の追求とも言えるのではないだろうか。グループは彼の人間性尊重の立場の実践にはかならない。彼のこの生涯の姿勢が、“セラピー”という特殊な関係を、一般の人間関係における“心理的成長”へ発展させた。人間疎外の叫ばれて久しい現代人に最も欠けている人間相互の信頼関係は、グルー

ブの中でこそ自然に回復する。筆者はダイナミックでまったく生き物のように自立的に働くグループの力に改めて感激するのである。

参考文献

- ① ロジャーズ『エンカウンター・グループ
～人間関係の原点を求めて～』（創元社 1982）
- ② ロジャーズ全集6『人間関係論』（岩崎学術出版社 1967）
- ③ ロジャーズ全集8『パーソナリティ理論』（岩崎学術出版社 1967）
- ④ ロジャーズ全集17『クライアント中心療法の評価』
（岩崎学術出版社 1967）
- ⑤ 島瀬直子・島瀬稔・村山正治編『カール・ロジャーズとともに』
（創元社 1986）
- ⑥ A. パートン『フロイト、ユング、ロジャーズ』
（岩崎学術出版社 1985）
- ⑦ 倉戸ヨシヤ『ゲシュタルト・セラピーの人格論』
（関西カウンセリングセンター 1983）
- ⑧ 加藤正明他編『増補版精神医学辞典』
（弘文堂 1985）

（1986年度 文学部 社会学科 卒業）

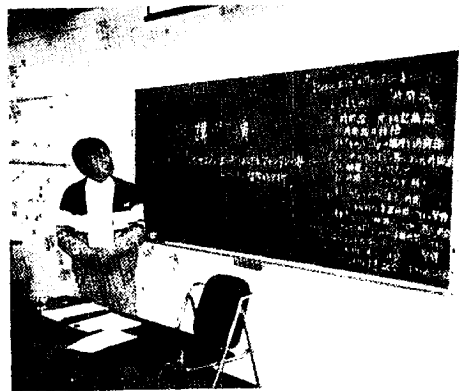
エンカウンター・グループについて考える

甲南大学 O G 小竹 代里子

ロジャースは、現代においてエンカウンター・グループ（以下E.G.と略）をはじめとする集中的グループ経験が急速に普及した原因の第一に、「文化の非人間化」（註①）が進んだことを挙げている。歴史を振り返る時、数々の人間の遺産には目を見張るばかりであり、私達の生活は異常なほど豊かになった。しかし、反面いつの間にか手段を目的とし、時間に追われて、機械の部品のように働くことが当たり前になってしまった。そこには人との真実な暖かい交流はあまりない。ロジャースの言う「文化の非人間化」である。けれども私達は、自分でも気が付かぬうちに手段を目的とすることに喜びや価値を見い出してはいないだろうか。お金を例にとればわかり易いかもしれない。はじめは自分の可能性を延ばすためにやりたい事があって貯め始めたものが、貯めていくことだけに喜びを見い出し、その繰り返しから抜け出られなくなるというように。価値の主体性について三輪正は「価値の根底には人間がある」（註②）と述べ、そして「人間が生き、希望し、欲求するからこそ、その対象としての価値がある」（註③）とする。それではなぜ先に挙げた手段の目的化というような価値の転倒がおこる

のだろうか。このことを三輪は「学問のための学問」「芸術のための芸術」などの例を挙げて、「自らこそ価値の主体でありながら、その価値を外化してその前にひざまづく唯一の存在である」(註④)と指摘する。人間はその根本に、価値を外化し対象化する欲求を持つということである。とすれば、ロジャーズの言う「文化の非人間化」が進んだことは、必然的な結果といえないだろうか。人間の心理的欲求は多角性を持つ。価値を「親密で真実な関係」(註⑤)への欲求、つまり価値を人間そのものに求めると同時に、対象化して外へも求めようとする、そういうものである。私はE.G.などの集中的グループ経験の急速な普及の原因を「価値に対する心理的欲求のバランスの崩れ」と表現したい。

人間はバランスの崩れたまま生きるのは難しい。現代のようにあまりにも外へ価値を求めすぎる時、「親密で真実な関係への飢餓」(註⑥)は起こってくる。E.G.の力はこの飢餓を癒す。ロジャーズの述べる通り、E.G.に参加することで「すべてが知られ、受容されているような状態」(註⑦)と「成長」(註⑧)をグループのメンバーは可能なものにしていくのである。言うまでもないが、E.G.において重要なのは「人との関係」である。ロジャーズは、ある人の体験の感想を引用している。「真実の変化は関係という文脈の中で感情の経験された時に起こる。」(註⑨)と。E.G.に限ったことではなく、頭の中で混沌としていたものが、言葉にすることで確認できたり、まとまったりする経験は誰しもあるだろう。又、過去の出来事を、対話の中で感情のレベルにおいて再体験し、こだわりから解放されたりもする。あるいは、人は「わからない」ことに捕らわれる時、「わからない」という枠から外に出ることができない。しかし、グループのメンバーに尋ねら



谷口先生の講演「ミヒヤエル・エンデにおけるファンタジー界についての哲学的分析」(報告書Vol.6に掲載)

れたり、自分自身もメンバーの一員として自問する時、「わからない」が「何が、何故、分からないのか」という問いかけに変わり、そこから一歩が始まる。体験者の話では昨日出会ったばかりの人達が、本当に自分にかかわろうとしてくれること、励ましてくれることを、そしてそれまで認められなかった自分が容認できる自分自身に変化したのを見い出したと述べている。一般にE.G.はセッションが始まった頃はぎこちなかった関係も、肯定的・否定的感情や沈黙までも含めてスムーズになって展開していく。ロジャーズの言う「日常生活で経験するよりはるかに密接で直接的な関係」(註⑩)へと発展し、そしてグループは「潜在力を発展させる促進的な風土を自らもっている……ひとつの有機体」(註⑪)としての力をも発揮する。ここで、哲学的分析と比較しよう。「見るものであると同時に見られるもの、聞くものであると同時に聞かれるもの……というように、能動と受動の両者を兼ね備えることは自己の身体の特徴であった。社会成員の間に相互的にこの能動受動の関係が見られる時、社会は全体として一つの身体のごとくであり、その社会の成員は自己をば社会と一体的なものともみなしうるのである。」(註⑫)哲学的分析によるこの状態は、社会と人間との関係を論理的に述べたものにすぎない。しかし、この状態の凝縮されたものが、心理学的にはE.G.と言えらると思うのである。

註

- ①カール・ロジャーズ 『エンカウンター・グループ』
(創元社 1988) P.15
- ②三輪正 『議論と価値』 (法律文化社 1972) P.209
- ③同上 P.209
- ④同上 P.209
- ⑤カール・ロジャーズ 前掲書 P.16
- ⑥同上 P.16
- ⑦同上 P.16
- ⑧同上 P.16
- ⑨同上 P.47
- ⑩同上 P.45
- ⑪同上 P.60
- ⑫三輪正 『身体の哲学』 (行路社 1982) P.60

実生活とエンカウンター・グループ

甲南大学 文学部 四回生 天野雅夫

今年の春合宿では、グループ単位でのディスカッションをその技法

とする心理療法がおこなわれた。こういったグループによる心理療法は、現在アメリカを中心として多くの国々でおこなわれているが、1974年にメイン州ベゼルでおこなわれたT・グループ(Training group)と呼ばれる、人間関係技法の訓練を目的としたものがその最初の形である。それ以降これらは次第に分化し、多くの種類を数えるようになったが、現在その主流をなすものは、上記の目的に加えて、経験的、治療的な効果を目指したものである。それは、「個人の成長、個人間のコミュニケーションおよび対人関係の発達と改善」(カール・ロジャース『エンカウンター・グループ』p.6)を意図したもので、そのなかの一つが今回おこなわれたエンカウンター・グループ(Encounter group)である。以下、それを実際に体験して思うところを述べてみたい。

本来エンカウンターとは、偶然に出会うという意味であるが、今回の合宿でのエンカウンター・グループは、偶然に出会った人間ではなく、知り合い同士で行われた。厳密にはこれは、エンカウンター・グループではないかもしれないが、日常生活そのものを振り返って考える時、そこには十分にエンカウターの要素が含まれている、と考えられる。これは言い換えると、私達の普段の生活もエンカウンター・グループである、といえるのではないだろうか。こうして日常の生活というエンカウンター・グループの中でおこなわれた、またもう一つのエンカウンター・グループには、いったいどのような意味があるのだろうか。

最初に言えることは、私達は自覚してそこに集まったということである。私達が自覚的におこなわないのであれば、日常の中にまた新しい限定された日常を作るといえることは、その意味を半減させるだろう。こうして私達は、無意識的に流れ去る日常の中に意識的な日常を作り出すことによって反省という行為がおこなえるようになるのである。この反省という行為とは、自己自身の拠って立つ根拠を把握すること、つまり自己の前提となっているものを究めようとする行為で

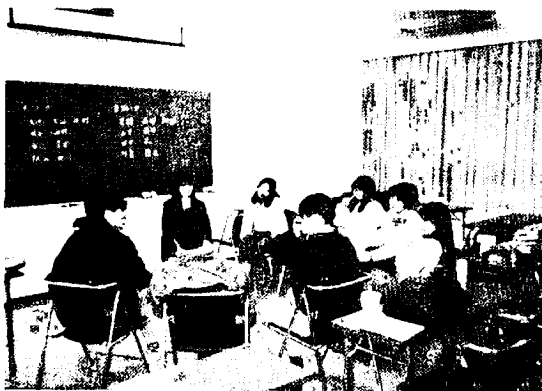


エンカウンター・グループの風景

あると言えるだろう。人間は、ただ闇雲に突っ走っているだけのときには人間存在であるということとはできない。ふと立ち止まって自分の態度を反省したとき、はじめて人間存在となりえるのである。とする人間存在とは、一方で人間のあるべき姿であるといえるかもしれない。しかし他方、人間存在とは最も普通の状態にある人間であるといふこともできるであろう。普通の状態にある人間とは、前を見て歩く人である。後ろを見ながら歩くことが人には不可能であるがゆえに、こうした「歩き方」こそ人の「生き方」なのではないだろうか。しかし、人は歩き続けることはできない。ときには立ち止まり、あるいは休み、そこで「自分の来た道は正しかったのだろうか」と自覚的に反省するのである。このように自己が自己に、自己を汝として対し得る自覚的存在となるとき、人は人格と呼ばれるのである。しかし自己が自己に対して自覚的反省をおこなうのみでは、真に道徳的ではない。そこに自己を他者との間柄において考える必要があらわれてくる。

自覚的ということとは、自分を知ろうとするとともに、他人を知ろうとすることである。三木清は次のように言っている。「自覚の内容は、自己であると同時に他者であり、そして自覚は単に意識に関わるものではなく、存在に関わるものである。単なる反省でなく、自己への反省が同時に他者への関係付けてある」ところに、自覚の本質がある。」

他者のことを考えない自覚がありえないのならば、他者のことを考えない反省というものもありえないことである。私達は、「人間」という言葉で表される通り、個人だけの存在ではない。我は汝があつてはじめて我であり、汝なくして我はありえない。また我と汝は、それ自体独立のものでありながら、独立したものではないというところにその特徴があるのである。そういった無意識的な自覚があつてはじめて、私達は、自分達のことを「人間」と言い得るのである。自己と他者の関係は、道徳的観点からみても自立自存のものではない。道徳的立場



熱心な討論

に立つことによって、自己と他者の関係は我と汝の関係に成るのである。三木は次のように言っている。「もとより単に外から強制されるのであっては、道徳ではない。外から喚び起こされることが内から喚び起こされることであり、内から喚び起こされることが外から喚び起こされることであるところに道徳がある。」さらにこうした我と汝の関係が、「私自身の主体的真理としての人間のまこと」を顕わにすると述べている。

こうして私達は、他者のことを考えつつ、「まこと」を持った人間としてその間柄においてある自己を反省するのである。さらに私達が、出会い、こうして同じ場所にいるということは、はじめに触れたようにまったくの偶然によるものなのである。この偶然が、意味あるものであるということはいうまでもないが、この意味ある偶然によって出会った私達が、さらに自覚的にグループをつくり、話し合う。それが今回の合宿の主なる課題であって、そこにこの合宿における意味が見いだされなければならないのではないだろうか。

エンカウンター・グループについて思うこと

甲南大学 文学部 四回生 山本 たまみ

「エンカウンター・グループ」について述べる。少々話が外れるかもしれないが、このグループとある映画に集まる人々のイメージが全く同じように感じられた。その映画の監督は、映画をセラピーであると語っている。つまり人は生きていく以上、仮面をかぶり自分に嘘をつくときもある。そんな自分に自己嫌悪しつつも、やはりそうせざるを得ずに流れていってしまう。しかしその映画に参加することで日頃の仮面を取りはずし本来の自分になるというものである。ただ単に映画を観るのではなく、自分も登場人物の一人になり、歌ったり踊ったりする。そうして自分の内的世界へと触れる。観客の中には、昔は臆病であったり対人関係がうまくいかずに悩んでいた人がその映画を通して明るく強くなれたという。エンカウンター・グループと映画と形は全く違っていても、その求めるところのものは、きっと一緒なのではないかと感じられる。

人は皆それぞれが、何かを抱え込んでいる。それを言葉で上手に人に伝えることが可能ならどれほど楽になれるだろうか。伝えられない、言葉にならない感情がいつも内面に存在していて、時にそれは人を苦しめていく。それがあはわかっているけれども、それが何かはわからないし、まして人と分かち合えることなど出来はしない。

人と分かち合えたらどれだけ素晴らしいだろうかと思わない時はない。しかし、それを持っている人と出会うことが不可能に近く思われ

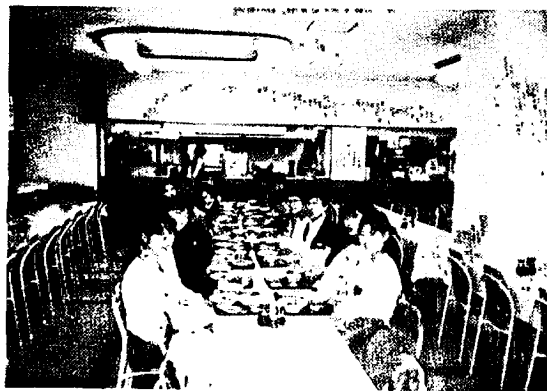
る。

しかしながら、エンカウンター・グループの資料を読み進めていくうちに、何もそれは特別なことではないと感じられた。特に第六章、あるがままの私は愛されないというのはまさに私の本音であり、私の本当の姿を知られたら誰も私の側にはいてくれない、だから自分のもちもので仮面をつくりあげ、外的現実に向かっていく。本当はAと言いたくても、仮面がBと言っている。そうして家に帰って、あの時何故Aと言えなかったのか、自分でその理由を充分わかっていながらも、自分そのものを外へ追い出すことが恐ろしくて、結局、何も進歩せずに終わってしまう。そういった内的葛藤と矛盾は常に自分の中で起きているが、他人の内的世界もそのように苦しいと知る術はないに等しい。こんなことで苦しんでいるのは世界で私だけなのでは、と深く沈みこみ、どこを向いても壁だらけの抜き差しならない気持ちでいっぱいになる。

このように自分に自信がなく、私的な感情を表にあらわさない人間がエンカウンター・グループに参加することで、自己の発展や成長という建設的な結果を残していることは意外である。私など参加しても、厚い厚い衣で自分を覆い隠してしまいたいと思うかもしれない。一步衣をはずそうという冒険を試みなくては始まらない。本の中にあるとおり、皆の援助と自分自身の援助からそれは必ずしも難しいことではないことがわかる。

自分が自分を守るための衣を脱した時、どうあるのか私には想像もつかない。そしてそんな自分を本当にわかってくれようとする人間がいるのだろうか。これは一度グループに参加してみなければわからない。しかし、本を読む限り、それは可能であるし克服できることではないかと思う。

第六章の始めの文章が大変印象に残ったので示しておきたい。『つまり、これがわれわれだ。～そして、時々われわれの歯車がかみ合う。』



セミナー・ハウスでの
夕食

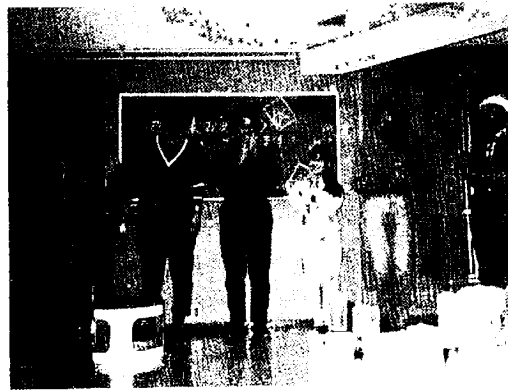
最後に、ものごとは総てアンビバレントで、絶対的な価値は持ち得ないと強く思う。普遍的に矛盾しているのだと思う。だから、自分の中にある孤独感も自分を守るための衣だと思う。ただ、それらに埋もれてしまうのではなく常にそれらを超えようとするのが一番大切なことではないかと思う。今ある自分を超えるための努力が必要であると思う。

談：合宿のエンカウンター・グループに参加できませんでしたので、資料のカール・ロジャース『エンカウンター・グループ』（創元社）を参照にしました。

エンカウンター・グループの報告と考察

甲南大学 法学部 三回生 辻 啓之

まず大まかな経過を報告しておく。最初に全体セッションがもたれ、谷口先生から「『いま、ここ』におけるグループの中では自由に話し合ってください。ただし、そこで話されたプライバシーに関することは口外しないように。」などの簡単な注意が与えられた後、A、Bの小グループでそれぞれのセッションに入る。小グループは1セッション1時間30分を3日間で10セッション、合計15時間おこなわれた。そして最後に、参加者全員から集めた報告（感想や意見）を紹介しながら、再び全体セッションがおこなわれ、それをもって全ワークショップを終了した。グループ全体の構成メンバーは、大学院生1名と大学生16名の合計17名、それをAグループ9名、Bグループ8名に分けた。



卒業生追い出しコンパ

参加経験者は1名で、ファシリテーターはA、Bそれぞれのグループで未経験の大学生2名ずつが担当した。ここでは、詳しい経過は記載せず、今回のエンカウンター・グループの特徴をロジャーズの理論の第一義的テーマである“人間性中心アプローチ”という観点から見てみることにする。

指摘すべき特徴の第一点としては、本来、エンカウンター・グループ（以下E.G.）とは「encounter：出会う」という言葉の通り、それまで面識のない初対面の人々が集まっておこなわれるものであるが、今回はその多くがゼミ活動を通して、1～2年の付き合いのある知人などどうしてあった。第二点は、ファシリテーターは経験をつんだ専門家が受け持つのが一般的であるが、今回はE.G.の経験自体が初めてという4名の大学生が先生から指導を受けて、ファシリテーターを勤めた。第一点の影響として、各参加者がなかなか自分の立場を私拭出来なかった。一方、平素から知っているだけに、他者の変化に対しては敏感であり、それぞれ驚きながらも受容していた。第二の特徴に関しては、自分がファシリテーターであることに囚られることなく、簡単な進行以外、他の参加者と殆ど同じように振る舞っていた。これらのことを、人間性中心アプローチという観点から見るとどのようなようになるだろう。

ロジャーズによると、人間性中心アプローチの中核的仮説は、「個人は自己の内部に自己理解や自己概念、基本的態度、自発的行動を変化させていくための大きな資源を内在させている、それらは、心理学的に定義可能な促進的態度に出合うならば出現してくる」というものである。そして、その成長促進的雰囲気を出現させるには三つの要因が必要とされる。第一要因は見せかけのない事であり、「透明」という言葉がこの雰囲気をよく表している。第二要因は、それぞれの人における変化の兆が受容され、大切にされ、賞賛される雰囲気を創り出す事であり、「無条件の積極的関心」と言われる。そして、第三要因は共感的理解である。これは、参加者が経験しつつある感情や個人的意味合いを正確につかみとり、それを参加者に伝えることである。この観点から見るとE.G.をおこなうに当たって重要なことは、上の三つの要因を満たし、成長促進的雰囲気を出現させることと言える。また、三つの要因を私なりに言い換えると、第一要因は自分自身を、第二要因は他者を受容することであり、第三要因は第一、第二要因の前提のもとに、その場に現れる様々な意味を感じとり、自然に表現することと言えよう。このような観点から、先の二つの特徴をこれらの三つの要因によって吟味してみる。

特徴の第一点については、既に組織化されているグループの中で、「透明」になることは出来なかったが、他者の変化に対しては敏感に反応し、受け容れることができた。第二点の影響は、第一要因に関しては問題なかったが、他者の受容という点では「無条件の積極的関心」

というところまで出来なかったように思われる。以上総合的に判断すると、この条件において互いの共感的理解の展開は十分でなく、ロジャーズのいう成長促進的雰囲気を生み出すには至らなかったと言えよう。しかし、他者の今まで知らなかった部分を見ることで、より一層その人を理解でき、自己を含めた人間の内部の混沌とした感情に様々な可能性を感じる事ができた。私はこの体験が、今後の生活の中で、より豊かな自己受容及び他者受容につながり、いずれは成長促進的雰囲気を生み出していく布石になっていると考えている。

参考文献

カール・ロジャーズ『エンカウンター・グループ』（創元社、1988）
同 上 『人間尊重の心理学』（創元社、1984）



アンケート

第18回谷口ゼミ春合宿における
エンカウンター・グループに関するアンケート

- I. 春合宿でのエンカウンター・グループがあなたにとって、どんな意味をもったか自由に書いてください。
- II. エンカウンター・グループの経験全体があなたの行動に与えた影響に関して。[以下、当てはまるものにマルをつけてください(複数可)]
- ① 好まない方向に変化させた。
 - ② なんら見るべき変化を起こさなかった。
 - ③ 短期間のあいだ変化していたが、今ではその変化は完全に消えた。
 - ④ かなりの一時的変化をもたらし、その一部はなお、{(a) 肯定的変化(b) 否定的変化}として残っている。
 - ⑤ 次の人との関係において変化してきた。
 - (a) 先生との関係
 - (b) 両親との関係
 - (c) 友人との関係
 - (d) 同学年生との関係
 - (e) 先輩との関係
 - (f) 後輩との関係
- III. 小グループの経験が与えた影響を、次のように感じる。
- ① 大部分は、傷つけられた。
 - (a) 不満状態にさせられた。
 - (b) 困惑させられた。
 - ② 援助的というより非援助的だった。
 - ③ どちらともいえないが、ほとんど違いがなかった。
 - ④ 非援助的というより援助的だった。
 - ⑤ 建設的な結果だった。
 - ⑥ 意味のある肯定的経験。
 - ⑦ 混乱させられ判断できない。
- IV. 全体セッションの与えた影響を、次のように感じる。
- ① 傷つけられた、混乱させられた、いらいらさせられた、退屈

- だったなど、ともかく否定的なもの。
- ② どちらともいえない、関心がもてない、ほとんど影響を受けなかった。
 - ③ いくぶん、援助的。
 - ④ 建設的で、はっきりと援助的。
 - ⑤ 意味のある肯定的経験。

V. エンカウンター・グループが自分自身の感情と他人の感情に気づくことに与えた影響に関して。

- ① 自分の感情により敏感になり、他人の感情がよくわかるようになった。これは私にとっては新しい経験だった。
- ② 自分の感情に気づくことにより、前より自分の{(a) 肯定的 (b) 否定的 (c) その両方の}感情を他人と分かち合える点でより開放的になった。
- ③ 以前も自分の感情に気づいていたが、こんなに大きなものではなかった。
- ④ 目に見えるほどの変化は何もなかった。
- ⑤ 自分の感情に前よりいっそう気づくようになった。そして、こうならないほうがよかったと思う。

神戸大学大学院 自然科学研究科 年令：27 性別：男

I. 今回の春合宿でエンカウンター・グループがもった意味はあまりなかったように思う。唯一感じるのはエンカウンター・グループ自体が特殊な環境であるために実際に感じることで少し違う反応を多くの人がしていたことだ。

- II. ②
- III. ③
- IV. ③

会社員 年令：25 性別：男

I. 今回の合宿でエンカウンター・グループを初めて体験したが、通常、対人関係というのはなにげなく行われている。しかし、その対人関係において自分が心を開いて他の人と接しないと、なかなか他の人も心を開いてくれないというのが、今回のエンカウンター・グループを通して分かった。とてもいい体験だった。

- II. ②、③
- III. ③
- IV. ③
- V. ④

高等学校教員 年令：25 性別：男

I. 人に対してははっきりと意見が述べられない性格の私は、ファッションライターであることを意識して積極的に発言することも、自分の意見を否定されることも拒否してきたが、思ったことをそのまま述べる方が、建設的な結果を得られたような気がする。

II. ⑤ - (f)

III. ① - (a)

IV. ③

V. ③

甲南大学 研究生 年令：24 性別：男

I. セッション全体において、一つのテーマを持って話し合ったわけではないので、特に印象に残る点はないが、ある先輩が客観的に自分(私)の行動に指示を与えてくれたのが非常にうれしかった。

II. ③

III. ④

IV. ③

V. ④

会社員 年令：23 性別：女

I. 言葉というものがどれだけ想いというものを伝えるのに限界があるか、コミュニケーションの難しさを感じた(お互いの思い込みによって、言葉が解釈されているということの発見)。

エンカウンターを通して、人と正面から向き合って何かを伝えたいと思うようになった。少なくとも心の中で人を避けようとすることはなくなった。みんな同じ人間なんだなあと思った。

II. ⑤ - (d)

III. ⑥

IV. ③

V. ② - (a)

甲南大学 文学部 研究生 年令：23 性別：女

I. 体調が悪かったせいか、思ったこととか考えたこととかがなかなかうまくいえず、そのうちに論理的思考から感情的思考に頭の中がすっかり変わってしまい何も思ったとおりに言うことができなくなったと思う。

でも翻って考えてみると、そういう何も言うことができないという状態に辛抱することを身をもって体験したので自分も含めて、人が何かを言いたくても言えないというつらい状態を分かるようになったと思う。

- II. ③
- III. ①- (a)、②、⑦
- IV. ①
- V. ②- (c)

会社員 年令：22 性別：女

I. とにかく、私自身の人との距離のとり方の下手さを痛感させられました。エンカウンター・グループが進んでいくうちに、私という像が他の人にどのように写っているのかが、見えてくるような気がしましたし、私を知ってもらうにはもっと何かを表現しなくては……とずっと言葉をさがしていたように思います。未だに、言葉さがしの段階は終わっていないように思いますが、人と向きあうときどきの心の動きが、ちょっとだけでも自由になったような気がします。谷口先生がよくおっしゃった、“黄金の沈黙”の存在を確かに感じながら、私はまだ、そこまで行っていない……だから、いまここから、進んでいこうという気持ちを持ち続けます。

- II. ④- (a)
- III. ②、⑥
- IV. ③
- V. ②- (c)

甲南大学 文学部 年令：21 性別：女

I. 思っていることを言葉にして伝えることの難しさをいつも感じているのだけど、こんなあたりまえのようなことが、とても大切なんだとあらためて感じた。言葉には言霊というものがあって、まわりまわって相手に伝わるということは、確かにあると思うし、それは怖いことでもあるし素敵なことでもあるけど、実際、思っていることを相手にちゃんと言葉にして伝えないと、ぶつけないと、自分の感情にも他人の感情にも、深く触れずに、終わってしまふことがあると思う。そんなことが人間関係にとっても大きな影響があることにあらためて気付いたことを、私にとってプラスになるようにもっていこうと思う。

- II. ⑤- (c)、(d)、(e)
- III. ⑥
- IV. ⑤
- V. ①、②- (c)

Ⅱ

第十九回ゼミナール合宿（夏季）

第十九回ゼミナール研修旅行のお知らせ

夏の日差しも日ごとまぶしさを増してまいりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。今年の夏もまた、谷口研究室ではゼミナール旅行を下記の通り計画しております。今回は埼玉にて、有機農業を实践されている金子美登氏の霜里農場を訪問し、また、『原爆の図』で著名な画家、丸木位里・俊御夫妻の丸木美術館を見学、お話しを伺う予定です。奮って御参加ください。

甲南大学 文学部 谷口研究室
1989年7月20日

～ ～ ～ ～ ～ 記 ～ ～ ～ ～ ～

目 的：霜里農場訪問・金子氏講演、丸木美術館見学・丸木氏講演、卒論中間発表

日 時 予 定：集合 8月21日（月）JR新大阪 中央改札口 AM.8:00
解散 8月24日（木）JR新大阪 中央改札口 PM.8:00
新大阪駅 ☎（06）304-2191

携 帯 品：参加残金、着替え、運動靴、常備薬、保険証コピー、学生証、洗面具、筆記用具、水着、懐中電燈、虫よけ、その他

研 修 先：埼玉県比企郡小川町下里809 ☎（0493）73-0758
霜里農場
埼玉県東松山市下唐子1402 ☎（0493）22-3266
丸木美術館

参 考 文 献：丸木位里・俊著『原爆の図』（講談社文庫）
金子美登著『未来を見つめる農場』（岩埼書店）
大江健三郎著『ヒロシマ・ノート』（岩波新書）
広瀬 隆著『危険な話』（新潮文庫）

スケジュール：8月21日（月）霜里農場見学、金子氏講演
8月22日（火）和紙工房・丸木美術館見学、卒論中間発表
8月23日（水）丸木氏講演
8月24日（木）リクリエーション（森林公園：水泳可）

宿 泊 地：21日（月）
新井屋 埼玉県比企郡小川町大字大塚46-1
☎（0493）72—0245
22日（火）・23日（水）
上沼旅館 埼玉県東松山市本町1-3-36
☎（0493）22—0207

申し込み方法：費用は48,000円です。うち30,000円を7月31日（月）
までに、 下記にお申し込み下さい。

送 り 先：〒612 京都市伏見区久我御旅町1-1
辻 啓之

問い合わせ：ゼミ旅行幹事
辻 啓之 ☎（075）931—3806
谷口文章先生 ☎（07712）3—9464



1989年8月21日から恒例の夏合宿が始まった。初日の21日には、金子美登氏の経営されている霜里農園を訪れ、翌22日は原爆の国で有名な丸木美術館に見学に行った。いうまでもなく夏合宿は大学の講義、ゼミ、研究会で行われている理論面を実践し、哲学が現実にとどのよう

に有効であるかを確認するため行われる。以下、その様子を報告する。21日に訪れた金子氏は、海外からの研修生も受け入れながら、健全で小規模な農園を営まれている。その基本は有機農業であり、生態系に合致した農業を営まれている。昼は草抜きや農作業のお手伝いをし、夜には、御夫妻とそこで研修している青年たちのお話を伺うことができ、自然の素晴らしさと厳しさを学ぶことができました。氏は、「かつて、おこっちはほろびきえていった国や文明に共通していることは、地球の表面の土壌をけずって収穫しながらほろんでいったのです。」(金子美登『未来をみつめる農業』岩崎書店)と言われるように、便利さ、快適さ、自己利益のみを追求する現代人の生きる姿勢を、有機農法という原点から批判され、人類の歴史的、空間的位置付けを明確にしたグローバルで長期のパスpekティブをもった、さわやかなお人柄でした。トウガラシもナスビも区別のつかない都会っ子の学生たちが、畑の手伝いで汗を流した後に食べた熟れたトマトの味は、きっと忘れられない思い出となったと思います。

22日には、丸木美術館を訪れました。理事長の石川保夫氏にまず原子力発電の功罪についてのお話を伺い、それから美術館を見学しました。数々の原爆の国は、私たちが圧倒し、これが本当に人間が起こし経験した出来事であろうかと深く考えさせられたのでした。いや考えさせられたというより深淵につき落とされ、思考が一瞬の間停止したと言った方が適切かもしれません。そして人々を根底から揺さ振り続ける魂の叫びを耳にしたのでした。しかし、このような人間の悲惨さ、醜さを正直に受けとめ、謙虚に反省したなら、私たちには手放して明るいとは言えなくとも可能性を持った未来があることに気づきます。その不安な未来を希望ある世界へ導くためにも、今回の訪問は意義あるものでした。さらに御夫妻が御高齢にもかかわらず創作活動を続けられ、潔癖なまでの正義感と人間の矛盾を冷厳に直視する眼があれほどの芸術へと昇華されたことに気づきました。また広島体験談など私たちへの遺産としなければならぬと決心したのでした。

最後に、丸木俊先生と『苦海浄土』の著者である石牟礼道子氏との対話を載せておきます。

「毒ガス変じて農業となる。農業変じてベトナム枯葉作戦の毒薬となる。平和な村へくるときは除草剤に化ける。原爆もヘドロも水銀も、ひとつ穴のむじなですものね。」

「どこが頭やらしっぽやら、つかんでもおきえても、ぐにやり、どろんどろんと体をかわす、手におえぬ大化けものを退治しなくっちゃならないのです。息の根を止めるまで、わたしたちは死んではならないのです。」(『原爆の囀』講談社文庫)



研修レポート

合理性に隠蔽されてしまったもの

甲南大学 文学部 三回生 阿部 哲也

盛夏の日差しも強く、セミの声も四方に響きわたる中、我々は埼玉県の小川駅に降り立った。有機農業を営む金子美登氏と、『原爆の図』で知られる丸木位里、俊御夫妻を訪れるためである。有機農業と原爆、今ひとつ自分の中で結び着かず、ピンとこない感じだった。しかしとりあえず、晴れた空、緑の山々に囲まれた田園風景、澄んだ空気にはほっとするものを感じていた。のどかな片田舎の午後、我々はこのんびりと歩きながら金子氏の霜里農園へ向かった。

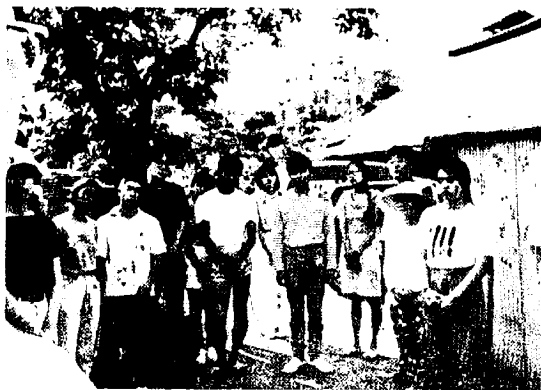
農園に到着すると金子氏、そしてそこで有機農業を学んでおられる研修生の人達が我々を快く迎えてくれた。皆さんの真っ黒に日焼けした顔が印象的だった。まず農園を一通り案内して頂く。古い母屋、牛小屋、鶏、うさぎ、水田に畑。そして有機農業の礎たる堆肥づくり。のどかな農村で営まれる有機農業の形態を僕は初めて知った。次に我々は教班に分かれて農作業に参加させて頂いた。僕はにんじん畑の草むしりを手伝わせて頂いたのだが、農薬の染み込んでない農地の土を触るのは初めてだった。除草剤が撒かれていないから雑草は多い。しかし針金のような、まだまだ未熟なにんじんでも一人前に甘く良い匂いをさせている。雑草より背の低い彼らは農薬の力を借りず、ゆっくりと力強く成長してゆくそうだ。日暮れと共に作業が終わる。その日収穫されたプチトマトを頂いた。普段目にするそれの、目を引くような鮮赤とは違い、ひと粒ひと粒不揃いで透明感のある朱色だった。そしてその、甘くみずみずしく嫌味のなさは、「ああ、これがトマトなんだな」そんな感じがした。いくつもいくつも食べた。その夜、昼間食べたトマトの感動も醒めぬうち、金子氏の講演が行われた。「話すのは苦手で…」と言われていた金子氏も、いざお話しが始まると熱っぽく有機農業を語って下さった。有機農業、最近よく耳にするこの言葉について、実はほとんど理解していなかったことを知った。グルメ志向、健康食品ブームの延長線上で、ただもてはやされているだけのものだというくらいにしか思っていなかった。しかし、日本の農業体制の現状、国づくりといった広大な視野で、かつ緻密に農業に取り組んでおられる金子氏の“農学者”としての一面を見て、何も知らなかった自分を恥ずかしく思うとともに、何も知らされていなかったことを疑問に思った。

「くるみの木はその木の大きさと同じ大きさの根を持っている。国

がくるみの木なら目に見える木は工業で、根は農業なんです。農業をおろそかにして国づくりはできません。」と金子氏は語る。減反政策で農地を減らし、多くの農業を投入して経済効率優先で作物を大量生産する。家畜、魚類の養殖もまた然りである。また材木や農産物の輸入に、なりゆきまかせて門戸を開いてしまうことの危険性。自給率の高い北欧諸国より格段に農業条件の整ったこの国の自給率の低さが物語る農業体制のずさんさ。利益第一主義に基づくむやみな工業化の中、おろそかにしてきたことに対して今や目をつぶってはいられないのではないか、そんなことを思わずにはいられなかった。

そして翌日、我々は丸木美術館を訪れた。原子力発電反対の意志表示として東京電力の原発電力25%分の電気代支払いを拒むが故、美術館内は送電停止という渦中にあった。館内の絵を見学して、まず驚いたのは、絵の大きさであった。そしてモノクロームで描かれる地獄のようなおぞましい絵の、見る者を引きつけてはなさない力には声が出なかった。館内の静けさとあまりにもおぞましい風景との対比はショッキングで体に力が入らないという感じがした。屍の山、亡者の群、傷つき苦しむ人々、目をそらしたくてもそうさせてもくれないのだ。どうしたらいいのかわからない、正直そんな気持ちだった。

そして丸木御夫妻の講演が行われた。ゼミ生の顔つきは皆硬かった。お二人とも高齢の御夫妻なのだが、ピンと張った意志の強さが感じられた。被爆当時、絵を描くに至ったいきさつ、そして現在なさっておられることと話は続いた。中でも俊先生の、いつも傷つけられるのは力をもたない弱い者、という言葉が印象深かった。御夫妻に今なお描き続けようとするもの、描くということと戦おうとする使命感は何であったか。それは生命の尊厳を踏みにじる人間悪であるのだと思う。かくも尊き人々の命を、人間自身で虐待するという、しかも今なお絶えることのないこの愚かさに対する言い知れない怒りであると思う。あの絵の力、そして丸木御夫妻の怒りを僕は忘れられないであろうし、



霜里農園入口にて

また決して忘れてはならないことであると確信した。

合宿を終えて考えさせられたことは、急成長する文明がその引き替えとして見落としてしまった多くのことの「重さ」である。人の心を忘れた欲望は戦争を生み、悲劇を生んだ。また現在、目先の経済成長に心を奪われ先走りしようとする人間の姿は、とりかえしのつかない悲劇の舞台を着実に作りあげているだけのことではなかろうか。なりゆきまかせの発展が行き着くべき所へ行く前に、忘れていたもの、見失っていたものを少しずつ取り戻さなければいけないのではないか。ともかく、“今がよければ、取り立てて困ることがなければ”そんな風潮から脱しなければならぬ時なのではないか。そのようなことを考えさせられた。

夏合宿私見 甲南大学 理学部 四回生 深谷 昌生

蟬時雨がすべてをかき消すかの様にその尋常ならぬ空間を包んでいた。一步日向へ出れば目眩しそうな日差しが降り注ぐ1989年8月23日、「昭和20年8月の広島、長崎のあの日もこういう感じの夏の日だったのだろうか？」そんな事を思いながら私は目の前の一夫婦の話に耳を傾けていた。

その2日前、東武東上線小川町駅に降り立った私達は小川町下里の霜里農場へ、有機農業を行っておられる金子美登氏を訪れていた。実際の年令を実感出来ない若々しい風貌を有する氏は、彼の仕事場であり命の源である農園と彼の元に集う同志とも言うべき人の中で共に生き生きしている。

草木や種々な作物即ち生産者、それらを食する人を含めた牛・鶏などの消費者、そして草木や消費者の糞尿等を見事な堆肥へと変える細菌等の分解者、更にはそれらにかかわる他の小動物等までもが見事に、しかし考えてみれば本来あるべき姿通りに、大地と太陽の元に共生し存在している霜里農場は山河に囲まれた地にあり、“良き日本”の典型を示している。本職として農業を営んでいる金子氏達にとってはお遊びに等しいような作業の手伝いをゼミの仲間と農園で行っていると、時間がゆっくりと静かに流れて行くのが解る。生命が溢れる空間に、自らその中の一つの生命として時間を共有して行くのは間違いなく人が求めるべき姿の一つだろう。

その中で僅かな間を過ごした時、Neverlandであるときえ思っていた霜里農場も、現代日本の社会の流れの中で例外では無い事を知ったのは、その夜、宿に金子氏に来て頂いて話を聞いてからである。“リゾート法”、近年登場したこの法は、国立・国定公園を含めた日本の地を無

差別にゴルフ場へと化すことを進めている。そしてその鋒先が霜里農場に近接する山に向いている。ゴルフ場が出来てしまえば……the-endである。そこに撒かれる大量の農薬、除草剤等（西洋と風土の全く異なる日本の地に無理矢理西洋の草を植えるのだから歪みが出るのは当たり前である。それがどのような事を巻き起こすかも考え得ない程に関係者はゲシュタルト崩壊しているのだろうか？）は、土壌・水・大気をも汚染して農場を含む広範囲の生態系を破壊し、他の諸地域の諸々の公害（私害）同様に人も蝕むのは明白である。原子力発電所や諸々の土木事業と同様にゴルフ場建設もその誘致により大量の金が動き人が動く。大きな権力を持つ一部の者の一瞬の快楽を求める暴力の為に、何ら関係の無い筈の静かに暮らしている人々を、そして大地さえも汚し壊して行く。総てのものはその能力に応じた責任を持たねばならないのに。

理論的には日本の食糧自給は可能である事などの希望ある金子氏の話も、見えざる力に左右されている自分を含めた多くの人々とこの国の姿を思うと、かき消されてしまいそうで憤りをおさえる事は出来なかった。

前日、8月22日に隣にある白亜の美術館で見た「原爆の図」等の圧倒的な迫力を、目の前に存在している丸木御夫妻にイメージを一致させる事は一見困難であった。しかしお二人の発する気と言葉は間違いなく「原爆の図」の作者のものであった。御夫妻の話及び作品により励起されてくる憤りが、先日金子氏の話聞いていて起きてきたものと基本的に同じである事に気付く事は難しくなかった。おそらくそれは、当の本人とは極めて関係の希薄な者により不必要に踏みにじられるものの怒り、悲しみ、そしてやるせなさへの同情から来るものであろう。「誰しも静かに生きていきたいだろうに。」いつしかつぶやいていた自分の声を押さえるのが苦しい。今までの事より、我々の闘うべき相手が見えてきた気がする。リゾート法、それにともなう環境破壊、様々



土の上で育てられる雛鳥

な公害(私害)、戦争とそれにもなう狂気そして原爆から原子力発電所まで、総てが我々同様の人間の所業であり、追及すれば我々一人一人の内なる自分即ち自分自身こそが闘うべき相手である。今の己を越えて行く事を全人類的に高めて精神社会をStep-upさせねば、どの様な法を含めた文明の発達も無意味である。人間は同じ失敗を繰り返すだけに違いない。

丸木俊夫人が最後に語られた、一揆首領として刑死した農民の「以後、他人の為に働くでない。」という言葉は、他人の為に働くことがいかに救いの少ない、むしろ徒労に終わるか不幸さをもたらすものである事を示してはいるが、幸福とはまた異なる意義をもつものである事を示している様にも私には思える。あえてこの台詞を俊夫人が用いたのも彼女自身が他人の為に多くの事を成して来たからであろう。私的幸福が人間にとっての絶対唯一の価値ではないのだから。

ゼミ合宿を終えて

甲南大学 文学部 三回生 光石 好雄

ゼミ合宿当初、何故か私の頭の中では、この合宿のメインは原爆の図の作者、丸木位里、俊御夫妻に会見することであり、有機農法の金子美登氏にお会いすることは、言わばその次の次であると決めこんでいたようである。このことは後に大いに自分自身を反省することとなり、また金子氏に対して大変失礼な態度であったと思う。私が何故、このように思ったかの理由を挙げてみると、まず丸木御夫妻が世界的に有名な画家であること、そして何よりも、原爆に反対する御夫妻は原発にも反対しておられ、ゼミ合宿前から、東京電力との抗争は新聞紙上にも紹介されており、その渦中の丸木美術館に行くということは、



堆肥作り

あまり知らなかった有機農法や金子氏の事業よりも、その時点の私の問題意識という点からも魅力のあることであつたからだ。

合宿一日目、埼玉県の小川町に着き、金子氏の農場を見学し、農作業を手伝っている間も、どこか私は遊び半分な気持ちであつた。しかかし、宿舎に帰って夜遅くまで金子氏のお話を聞くうちに私の意識も変化していった。氏の有機農法にかけの情熱を感じたし、一見近代農法と比べて非合理的だと思われがちな有機農法がいかにか合理的であるかを知ることができたし、何よりも、氏が現在に至るまでに大きな挫折を経験され、それにもかかわらず、五年後、十年後の日本の未来を考えておられたことに私は大いに感動した。これは、丸木御夫妻のお話をうかがった時にも感じたことなのだが、両者とも、つねに現状に対して問題意識をもち、また社会に対して問題提起し続け、これからの未来を考え、危惧されている。ただ単に過去にしがみついているわけではないのである。金子氏の当面の問題として、小川町にいや全国各地に、リゾート法の制定により造成され続けているゴルフ場による環境破壊がある。ゴルフ場は金子氏の農場の近隣にも造成される動きがあり、氏の農場への農薬汚染も心配されている。これは金子氏が長年培ってきたものを根底から覆すものである。この問題は氏一人が頑張ってもどうしようもないことである。それにしても、経済という名のもとに、お金という怪物の前にすべてが許されてしまう日本という国は、やはり方向を間違ってしまったようである。農作業の後に食べたあのトマトの味を思い出すたびに、我々が追い求めてきた豊かさとは何なのか、という思いがしてならない。

合宿三日目、いよいよ丸木御夫妻に会見する時がやってきた。二日目の前日、丸木美術館を見学したとき、私は原爆の図よりもむしろ南京大虐殺の絵が印象に残ってならなかった。私は画伯たちがあの絵を描くに至った動機を聞いてみたかった。

丸木御夫妻のお話を聞くうちに、何故原爆の図を描くに至ったかわ



堆肥作りの指導を受ける

かるような気がしてきた。御自身あの原爆で被爆され、またあの悲惨な光景をかいま見られたことは、十分に動機たり得るが、それよりもなお御夫妻の心を動かし続けるものは、あの戦争で死んでいった多くの人々の亡霊であるような気がしてならないのだ。そしてあの恐ろしい原爆を生み出したのは、戦争を始めた日本人のせいでもあるのだ。原爆の図で戦争反対を叫ぶだけでは、どうしても片手落ちになってしまう。そういった意味でも絵という媒体で、日本人自身の大きな過失を白日のもとにさらし描ききらなければいけなかった。南京大虐殺の絵があればほど醜く、狂気に満ちていたのは、そういう人間性の醜悪さの意味あいがあったのだろう。しかし今思い起こしてみるならば、あの数々の絵は、逆説的だが何と愛情にあふれているのであろう。悲惨きわまりないあの絵に登場する人々は、どうしようもなくせつなく、そしてお二人の戦争で死んでいった人々への慈しみと愛情が感じられてしかたないのである。

丸木御夫妻のすばらしいところは、原爆だけにこだわらず、次々に問題提起されていることだ。次は天安門事件を描く構想があるらしい。御高齢にもかかわらず、次の作品への意欲を燃やされている姿を見ると、頭が下がる思いがする。最後に俊画伯が言われた言葉が印象的であった。

「問題提起は愉快である。」

このゼミ合宿の金子氏と丸木御夫妻を結び付けるものが、合宿を終えようとするころわかってきたような気がしてきた。それは、人間への愛情ではなかったのだろうか。

私達の未来とは

甲南大学 文学部 三回生 松本昌樹

人類には、“明るい未来”は望めないらしい。私自身が明確な資料や知識に基づいていないので、「らしい」としか言いようがないが、近頃の世の中の様子では、どうもそのようである。地球規模での環境破壊や公害問題、食糧問題、また原爆・原発のような核の問題等を、毎日のようにテレビや新聞、雑誌で目にする。しかし、そのすべてが真実なら“明るい未来”どころか、私達には“未来”そのものが来そうにないように思われる。これらの本当に命にかかわるような重要な問題に対して、ジャーナリズムで報道されるほどには、ほとんどの人々は切迫した感じはもっていないだろうと思う。私自身もその中の一人だと思うが、それらの問題についての記事を読んだり、話を聞いたりした時には深刻な目前の問題として考えるのだが、何故かそれがその場限りで自分の中に確かな問題意識として残らないのである。

今回のゼミ合宿では、まさにこれらの問題に真正面から取り組んでおられる方々にお会いしてきたが、私のように何ら問題意識も持たずに無責任に生きている者にとっては、圧倒されるような思いであった。金子美登氏の実践されている有機農法も、丸木位里・俊御夫妻の御活躍も共に現在のことだけに停どまらない“未来”に向けての、素晴らしい意義のある事だと思う。このように活動している人々のいる反面、どうして私のように実際に何もしない人々が多いのだろうか。その中の一人である私個人の考えを述べたいと思う。

私にしてみても、出来ることなら現在の世界中の状況が良くなって欲しいと思うし、自然も動植物も人間も含めたすべての未来が明るく輝けるものであったほうがよいと思っている。しかしながら、それでは具体的に私に何ができるかと考えてみると何もできないような無力さを感じてしまう。

例えば、地球規模での環境破壊に対して、個人で何かするなどには到底、不可能であろう。それでも一人一人の力が集まれば、と言う人もいるだろうが、現在の世の中のしくみでは、実際に世界を動かしている人々が、本気でどうにかしようとしなければ、一般の人々のレベルでは、できることにも限度があるだろう。それに、私も含めた一般大衆が本気で団結して動くのは、問題が目に見えて日常生活に直接大きな影響を及ぼすものである場合であって、何十年、何百年先に結果が出ることに對してはまず無理ではないかと思う。最近の日本国内のことていうと、消費税に必死になって反対した家庭の主婦等が、地球全体を救うためにといわれて、署名集めに走り回ったりすることはないだろうと思えてならない。

このように私達は目先の利益や快楽に捕らわれやすく、未来にまで目を向けて物事を見ることは難しい。だから、今回のゼミ合宿の参考文献の一冊であった『危険な話』（広瀬隆著 新潮文庫）を読んでいくら恐ろしいと思っても、いざ何をするかとなると困り果ててしまう



牛糞運びを手伝うゼミ生

のである。丸木御夫妻のように、原子力発電による電気の料金を払わないといった行動をとることを考えても、それで実際に電気を止められてしまえば明日からの生活はどうなるのか、という問題のほうが大きく見えてくるのである。

そうすると、私達の“未来”はどうなるのだろうか。現代の様々な問題の源は人間の心ではないかと思う。今問題になっている過剰な文明・文化の発達にしても、考えてみれば、そのもとは少しでも便利に、快適にという人間の努力の積み重ねであったはずで、当初は人間の心も今に比べて純粹であったのではないだろうか。それが長い年月のうちに、少しずつ病んでいき、気付かないうちに取り返しのつかないほどに歪みねじ曲がってしまったのだろう。したがって最終的には、様々な問題の解決のための答えは個人個人の心にあるのではないかと思う。だからといって「愛は地球を救う」といった単純なものではすまないだろうと思うが。

私達の“未来”は、すべての人々の認識を変え、一人一人の心から始めて社会、世界全体へとその歪みを治していくのと、それこそ地球がなくなってしまうのとの、どちらが先になるかにかかっているだろう。

「生きるか死ぬか」の問題

甲南大学 理学部 三回生 辻 孝司

今回のテーマである「有機農業」と「原爆・原発」は、個々に色々な形で耳にしてきたが、それだけに一見つながりのなさそうな事柄だと今まで思ってきた。しかし、この二つのテーマは両者とも「人間が生きるか死ぬか」の、もっと大きな視野でいえば、「地球が生きるか死ぬか」の問題に関わっているのではないだろうか。



完熟堆肥

まず、有機農業についてだが、初めて耳にした時、はっきりいってピンとこなかった。父方の母屋が農業を営んでいるので、小さい頃には父につれられて手伝わされたことも何度かあった。だから、金子氏をはじめとする有機農業家の方々もそんなに変わったことをしているわけではないだろうと思っていた。

確かに実際にやっておられる作業を見て、別に新しいことだとは思わなかった。というよりも、現在一般になされている農法ではなく、原点に戻った農法だと思う。特に堆肥づくりは金子氏自身がおっしゃるとおり、自然の摂理をうまく利用した、まさに基本というべきものである。便利さを追求するばかりの現代の我々からすれば非能率的でナンセンスだとされがちであるが、何よりも自然に対抗するのではなく、自然や動物と一体化していこうとするところが、有機農業のすばらしい点ではないだろうか。トマトの味はその証拠だ。普段、実験で多くの小動物を殺す僕にとっては、少し心に留めておくべきことだと思った。

しかし、その有機農業が現代の人々にはまだまだ理解されていない。また、理解されるまでの過程で生じた問題の多くはあまりにも利潤にとられすぎたことばかりのような気がする。個人の損得勘定、土地問題など、今の日本の悪い点がもろにでていいる。特に金子氏の言っておられたゴルフ場問題には共感するものがあつた。研修旅行に参加する二十日程前に所属学科の実習で高知の浦之内湾に行ったのだが、その周辺の小高い丘にゴルフ場があつた。それを見て「なんでこんな海に近い所にまでゴルフ場を……。」と、なんだかばかばかしく思つた。日本人にはまだ自然を征服しようとする傲慢さが根強く残つていいるようだ。最後のツケが自分に回ってくるということをもっともっと自覚しなければならぬ。

そしてその後の丸木美術館への訪問で、先にも触れた「地球が生きるか死ぬか」という問題を更に痛切に感じた。丸木御夫妻の描かれた



畑の草抜き

絵の中の人々の表情は放射能がもたらした地球最大、最悪の惨事を我々に示すものであると思う。

だが、原発は既に我々の日常生活を支える電気を供給するがゆえに、自分は危険だと思っていながら原発を半分容認してしまっているし、また失くしたいとも思っている。しかし実際それを素直に受け入れられない気持ちがあるのはなんともいえぬディレンマだ。原発問題に対して今、自分は何ができるのかと問われたらいったい何と答えられるだろうか。

以前テレビで次のような報道があった。「アメリカでは、スリーマイル島の原発事故以後、再び原発事故があった場合に備えて、一般家庭に事故時の対処の仕方を記したマニュアルを配布している。しかし日本ではそうしたことは一切なく、いつも『原発は安全』ということだけを前面に出すばかりである。」確かに言われてみればそうである。テレビの原発のコマーシャルを見ている、「安全」ということしか口にしていない。そして実際に事故があってもあいまいな処理しかしていない。丸木御夫妻をはじめ多くの原発反対派が訴えているのは、「事が起こってからでは遅すぎる。自分の命を大切に思うなら即原発をやめよ。」ということではないかと自分は考える。付け加えておくと、自分は日本の原発が事故後の対処さえ「きちんと」すれば原発は大いに結構と言っているのではない。だいたい、その「きちんと」という言葉もあまりに無意味な気がするからだ。

「しあわせですか、しあわせですか、あなた今」今年もやっぱりこの言葉を考えさせられた。「はい、そうです」と自信をもって言えるのは一体いつのことだろうか。

反・現代社会

甲南大学 経済学部 三回生 小西 克弥

現在、我々の生活の周辺には物が溢れている。それらはいずれも何等かの形で日常生活に寄与しており、豊かさ、快適さをもたらしている。しかし、快適とは人類にとっての快適でしかなく、多くの代償を伴った上での事なのである。にもかかわらず、現状に慣れてしまった我々はなにかと都合の良い解釈をしてそれらを見過ごしがちである。そうしたこれまでの積み重ねが、地球的規模の環境破壊を招くことになった。今回のゼミ合宿で訪れたのは、こうした現状に危機感を持ちそれぞれの分野で行動に移しておられる人達だった。

金子さんは、現代農業の抱える数々の問題を解決すべく、有機農業を実践しておられた。それらの知識を持っていなかった私にとって農場で見たこと聞いたことのすべてが新しく感じられた。中でも、有機

農業の基礎と言われる堆肥作りは、その技術や、無駄なく効率よく七十度もの熱を発生させるバクテリアの力に感心させられた。そして無農薬を目指しているにもかかわらず、堆肥を作る原料の段階で、農薬が入ってきているということ、現在の日本での無農薬の実現がいかに難しいことが分かった。

雑草抜き、堆肥作りなどの作業を手伝わしていただいた後、一人一人熟したトマトを戴くことになった。適当に枝から取って食べたのだが、洗わずに口に運ぶことが非常に新鮮に感じられた。以前雑誌で、一般的なトマトの生産過程を紹介する記事を読み、その見事なまでの薬づけに愕然としたことがある。“現代の農業は、何を狙っているのだろうか？”答えは、収穫率の高さと、流通の便利さ、つまりパックにきれいに収まるような均一なサイズのものも多く採ればよい、ということである。こうしたことが、食べ物を必要な場所に形として存在していれば、生産過程がどうであろうと構わないといった“商品”にしてしまったのである。その反動が、やたら“本物指向”のグルメブームを起し、飽食を助長させているとしたら、これほど馬鹿げた話はない。こうした現在の農業を考え直すうえで、有機農業の果たす役割は大きいと思うが、どれほどの影響力を持つかは人々の“食”に対する意識次第である。

金子さんは、ゴルフ場問題にも取り組んでおられ、先日もテレビで町の役人を相手に抗議している場面が紹介されていた。役人に見れば、本来町がすべき環境整備は開発側が負担、ゴルフ客は保証されているとあって、なかなか引き下がろうとはしない。そもそも今日のゴルフ場造成ラッシュの原因は、休暇の増大に伴うレジャー(ゴルフ)ブームであるが、それ以上に会員権が投資の対象になっていることが問題なのである。言い換えれば、金で自然破壊をしていることになる。人間が勝手に価値を決めた金をもって、自然を買い戻すのは不可能であることを認識すべきである。それは、次に訪れた丸木さんが取り組



エンジンの間引き

んでおられる原発問題にも共通するところがある。

チェルノブイリの恐ろしい被害状況が伝え続けられている今日でも、日本各地での原発の計画は絶えず、地域住民と電力会社の争いをよそに、裏で政治と金が渦巻く。こうした原発に反対の丸木さんは、原発分の料金を払わないことでその態度を表明し、活動を続けられていた。我々が美術館を訪れたときは、電力会社から送電を止められており、自家発電の弱々しい照明が広い館内を微かに照らしていた。

そうした条件下で見た作品の数々は、文庫本で見たものとは全く違って見え、その大きさ、作品から訴えかけてくるもの、全体から湧き出る強烈なオーラは、私を圧倒するのに充分だった。これらの作品を描く力の源は、“美しいものを傷つけたことへの怒り”といわれた俊さんの言葉に、女性として、また芸術家としての信念を感じ、それが私にはとても印象的だった。毎年、原爆の日、終戦記念日になると、慌ただしい日常のなかで遠ざかっていた戦争に対する問題意識が引き戻されるが、丸木さんの信念はそうした時間や場所を超えたところで常に作品の中にいきづいており、それが日本人のみならず世界中の人々の共感を呼ぶことになったのだろう。今後、新たな“原発の囃”が美術館に展示されないことを望む。

霜里農園を訪れて

甲南大学 文学部 三回生 上田 雅美

刺すような夏の日差しの中、暑さからくる疲労を隠しきれず、私はぼんやりと歩いていました。続いていくのか、それとも草の中に途切れてしまうのかわからない道を入ると、そこに一軒の農家が現れました。そこが私達が見学させていただいた霜里農園でした。「霜里農園」という看板が立っているわけでもなく、私の田舎では珍しくないありふれた農園の風景。しかしそこに農園の御主人である金子美登さんが登場すると、おだやかな緊張がみなぎります。

日焼けした顔と白い歯が印象的な金子さんが静かな、とうとうとした口調で農園の説明をして下さいましたが、しかし私はその何気ない姿に現場を知る者の厳しさを見たような気がします。

きれいに掃除された牛舎で寝そべる牛たち。不快なおいの全くしない鶏舎で飛び跳ねるたくさんのひな鳥。毎日毎日、長い時間と労力を費やして作られる堆肥の列。農園の随所に、細かな気配りと工夫がみられ、農園というものの内部を初めて覗いた私は新鮮な驚きを感じました。この霜里農園は有機農法を実践していて、ここで収穫された野菜や卵は、契約した近隣の住民の食卓に届けられ、いわゆる流通ルートには出荷されていないそうです。

大量に加工され、すぐ手に入る食品を私達は宇宙食のように、ただ空腹を満たすものとして摂取する傾向になりつつあると感じます。食事とは、体を動かすエネルギーを補給するための行為です。しかし私達は、そういう基本的な生理欲求の他に、食べ物の色や形、味を楽しむ食事というものを知っています。そして、その食事を作ってくれた人の愛情、料理の材料を作った人の心に感謝する気持ちも知っていたのではないのでしょうか。私は子供の頃、食事時にはいつも母親に「苦勞して農家の人が作った野菜です。それを思ったら残せないでしょう。食べ残される野菜の気持ちはどんなものか考えてみなさい。」と、しつけられました。子供の私はそこからどんどん空想をふくらませ、近所の農家の苦勞や、果ては野菜達を擬人化し、その気持ちを考えてみたものでした。

しかし、学校に行くのに畑の中の道を通り、農家の雰圍氣を肌で感じた子供時代とは異なり、この都会に暮らしてみても、大量に生産される加工食品に囲まれ、また消費されず大量に捨てられる食品があることを知りました。捨てられるために作られた食べ物達……。

現在は、大手流通企業が市場を握り、地域性を無視した流通ルートが展開されているため、生産者と消費者が完全に区別され、品物を手渡しするということが不可能となり、両者の関係は見えにくくなり、商品と貨幣との交換、という表層的な関係しか見えなくなっているようです。誰が、どこで、どのように作ったかわからない野菜や肉達。そんなものでは食べ物ひとつひとつが持っている人と人とのあたたかいつながりは感じる事ができず、生命の尊さを感じる心すら麻痺しつつあるのではないのでしょうか。ファーストフードのフライドチキンは、油で揚げた鶏肉の切り身以外の何物でもなく、もとはエサをついばむニワトリであったことは思いもしない。

私達は霜里農園でほんの数時間、作業の手伝いをさせていただき、金子さんが「踊りを踊るようにできる」とおっしゃる根氣と忍耐のい



トマトの手入れ

る労働の一片を知りました。土に根の生えた作物にじかに触れ、その育つ過程を想像できる。そんな背景を持った、木で熟れた赤いトマトをいただいて、私達はどんなにおいしくそれを味わったことか。

品物を手渡してきける関係、心と心を通い合わせることでできる地域を取り戻すには、どうすればよいのか、不勉強の私にはまだまだ自分なりの考えをまとめるに至りません。しかし、あのトマトを食べた時の満足感、金子さん達と共に同じ時間を過ごした時に感じた心の潤いを忘れないことが、環境を考えると時の出発点になると思います。

人間と自然の関係について

甲南大学 理学部 三回生 村松 圭吾

金子さんのお宅へ向かう途中、田園の間の道を通った。田園と言うと、私がいつも思い出すのは、子供の頃、埼玉のはずれにある母の実家へ行ったときのことだ。私はそのとき初めて田園のなかを歩いた。畦道を歩くと一歩毎に蛙が跳ね、水の中をのぞき込むと、何やら得体の知れない虫が泳ぎ回っていた。その頃から生き物の大好きだった私は、相当興奮したものである。それ程詳しく覚えている訳ではないが、とにかくその時の田園には濃厚な生き物の気配があった。こんな記憶から、今でも私は、田園の近くを歩くととき無視して通ることが出来ない。畦道や水の中に生き物の姿を探す。金子さんのお宅へ向かう途中でもそうだった。

途中の田園では農業が使われているらしく、生命らしきものは何も無かった。蛙はおろか、ちょっとした水たまりでも必ず見掛けていたアメンボすら居なかった。生き物の気配がしなかった。しかし、さして失望した訳ではない。近頃はどこでもそうなのだ。夏の盛、生き物



自然のトマトの味に感激

の気配が最も濃厚に溢れている筈の季節に、沈黙したままのこの姿が、今の日本の田園にはごく普通のことなのである。

“沈黙の春”ならぬ“沈黙の夏”。水田は、様々な化学薬品を飲み込む“稲の工場”と化してしまった。何かの本で呼んだが、“我々は、便所の水を流すのと一緒に、赤ん坊まで流してしまった”のではないだろうか。

人間に限らず、生き物が“生きる”という事は、すべての生物が形作っている生態系という環の一部を担う事である。現代の人間は、そのことを忘れてしまっている。田園の“工場”化はその現れなのだろう。人間と、周りを取り巻く自然との関係が希薄になってしまったのだ。

希薄になったのは、人間と自然の関係だけではない。人と人との関係もまた、希薄になってきている様に思える。

モノを造る人は、そのモノを買う人を知らない。野菜を作る人は、その野菜を食べる人を知らない。大量生産・大量消費の社会と、それを支える複雑怪奇な流通経路が人と人との距離を遠ざけてしまった。一般の農家にしても、自分達の作った米や野菜を食べる人を知っていたら、有害とわかっている農業を使うだろうか。

こうした意味からも、農場の工場化を否定し、生態系の一部としての農業を実践する金子氏が、消費者とのつながりを重視しておられるのは当然のことだろう。

正直に言って私自身、自然について考える時、自然と人間を一体のものとして考えることは少ない。“人間の手のまだ触れない”自然、それが私にとり、最も魅力的な“自然”の形であることもまた、確かである。しかし、金子氏の農場には、人の手が入っていてもなお魅力を失わない、人間と共棲した“自然”があった様に思う。盲目的な自然保護主義の誤りは、この点にあるのではないだろうか。人間が自然に対する敵であってはならないのだ。

金子氏の農場で、私がひそかに感動したのは、堆肥のわきの水溜まりにおたまじゃくしが群れているのを見つけたことだ。金子氏の農場は、工場ではない。生き物の気配の濃厚に漂う人と自然の接するところだ。

私は金子氏に人と自然の、そして人と人との関係について大切な事を教えて頂いた様に思う。

有機農法をこの目で見て

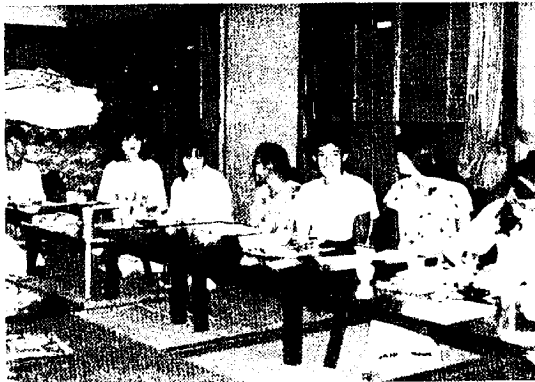
甲南大学 理学部 一回生 前田 拓志

今回のゼミ合宿に参加しようと思った理由に、霜里農場での有機農

業の見学があるからというのが含まれている。この有機農業について最初に知ったのは、昨年読んだ『植物の神秘生活』といういささかオカルティックなところもある本によってである。その時は夏休みということもあり、熱中してどこかで実験して確かめてみたいとも思ったが、休みが終わると、記憶の片すみに行ってしまった。それから一年たち、この目で見る事ができた。

いろいろ考えながら金子氏にお会いしてお話を伺うと、自分の予想とほとんど違わないのに驚いた。たいていの話は聞くと見るとは大違いであるが、この場合は違った。嬉しい驚きである。違いといっても土地を耕すかどうかとか、肥料の違いといったもので、アメリカと日本の気候風土の違いを考慮すれば、違っていて当然といった類いのものであった。

大事なのは化学合成された薬品（ハロゲンや石油化合物がその多数を占めている）を使わないことであると言える。農業を使わないで作物ができるか、と一般の農家の人々は言うだろう。虫がわき、病気になる、とても食べられるものはできないだろうし、ましてや商品として店頭で並べる事などできないと考えるだろう。ところが、農業を使わなくても作物はできるのである。形が少々良くないのは事実であろうが、味の差を考えるとそんなことは無視してもよいだろう。いやむしろ、有機農法で熟した方が味がいい。少々の虫はつき、病気にもなるだろうが、農業を使ってもと言うより、使った方が病虫害は増えるであろう。何故なら、無農業状態では、作物に害を与える虫(害虫)は繁殖するが、その虫を補食する天敵も繁殖するために、それほどの被害を及ぼさないからである。これに対して農業を使った場合には、最初は虫は減る。この時点では、農業の方が勝っているのである。しかし、しばらくたつと薬物耐性を備えた虫が発生する（天敵となる生物は農業に弱い）。そこで、より効き目の強い農業を作る。一時虫が減り、また増える。このようないたちごっこが延々と続いていく。付



金子氏のお話を伺う

け加えるなら、人間の体に良い農業というものを聞いたことはない。以上は主に殺虫剤についてであるが、殺菌剤、除草剤についても同様である。

このように書くと、有機農業は非の打ち所がないよう思われるが、問題点が無いわけではない。いくつかを挙げてみると、まず経済的な点、金子氏に伺ったところによると、三年間は元をとれないそうである。つまり三年間赤字でもやっていける蓄えが必要なわけである。次に余暇の問題、農業を使った場合に得られる余暇は、有機農業では得られず、長期の旅行などは不可能であろう。その他にも、農村などで一つの農家だけが有機農業に切り替えた場合のほかの農家との摩擦などがある。これらが克服されたとして、有機農家が続々と増えてきたとすると、困るのは製薬会社であるから、何等かの対策をたててくるだろう。

霜里農場では、近隣のゴルフ場造成に反対している。日本のゴルフ場は、毒の溜まり場のようなものであり、汚染された水で有機農業をしても意味がない。

このように見えてくると、状況は多難というより、悲観的でさえあるかもしれないが、人々の作物に対する見方や価値観が変わることに希望をもって是非頑張っていて続けていただきたいと思う。

現代人の課題

甲南大学 文学部 四回生 秋山 美紀

『飽食の時代』である現代、我々は食べ物について考えなおさなければならない。知らず知らずの間に我々は毒を体内に取り入れてしまっているのだ。お母さんが腕によりをかけて作る料理も、本来なら安全で愛情いっぱいであるはずなのに、現代では果たして安心して子供達に食べさせることができるものであろうか。「体にいいから」といって食べる物が実際は体に有害だったりするのだから、本当に恐ろしい世の中だ。こういう有り様が高度成長の結果現れたとするのなら、なんとお粗末な高度成長であることか。それによって人々は、自分自身の首を絞めていることに気が付いていないのだろうか。気が付いていても目先の利益ばかりを考えている現代人には関係のない事なのだろうか。物質的な豊かさを追求したばかりに心の豊かさの方はずっと後方でもぞもぞしているといった感じだ。目の前の利益の為に善悪の区別もつかなくなり、人情の一片もない人々の横行する世の中なのか。そういう所へ何もわからない子供までもが巻き込まれているという現状だ。

我々にとって欠かすことの出来ない有り難い食べ物が汚染されてい

る。本来なら必要のないようなものが混ぜ込まれていたり、ふりかけられたりしているものが「食べ物」だろうか。こんなにも豊かな世の中になりながらも欲の方は上へ上へと登りつめていくのか。こういう時こそ向けるべき方向が他にあるはずだ。「精神的な贖済」を心がけてはどうか。目先の損得に捕らわれずに常に心安らかな状態にいる、自分自身にとっても良く、周りにとっても良いことを考える、自分の親や子供、隣人を思いやる心がある。このようにできるならばそう無茶苦茶なことはできないはずだ。物質的な豊かさを求め続けてもきりが無い。次から次へと現れる欲の対象物をすべて手に入れることなど出来るはずもない。そして、形あるものはいつかは壊れる。しかし、精神的なものは決して消えてくはない。精神世界を豊かにすることが人生に潤いを齎すのではないだろうか。知人で本を読むことは時間の無駄だと言った人がいた。しかし、こういう無駄こそが精神世界を満たし、心安らかにするものではないだろうか。無駄を取り除いてしまったなら、なんて無味乾燥な人生であることか。

こういう時代の中で、農業を使わないで有機農法を実施していってらっしゃる金子美登さんを我々谷口ゼミ一同が訪ねた。目がキラキラと輝いていて、未来を見つめているんだなというのが金子さんの第一印象だった。早速農園を案内していただいた。牛や鶏、うさぎ（これは非常食なのだそうだ）、それから畑を見せていただいた。草抜きやトマトの蔓を竿に紐でくくりつける作業のお手伝いを少しさせていただいた。特にトマト畑での作業は印象的でトマトの実からだけでなく、葉や茎からきついトマトの香りがした。ちょっと青くさいが自然のまさしくトマトの香りがした。一口かじってみるとなんと水々しくて甘く美味しい味がしたことか。「これがそうか」というような味がした。味覚だけでなく、視覚、嗅覚、触覚を働かせてトマトを味わった。みんな無邪気に、子供の頃にもどったかのように土と接していた。農園の実習生の人達と軽口をたたきながら楽しく作業をさせていただいた。ここには自然の秩序があるなと思った。夜には我々の泊まっている宿で金子さんのお話をお聞きした。日本を含む世界が、抱え込んでいる問題、時代背景と関連づけながら、これからの人に課せられた課題、そして有機農法の必要性等について語られた。金子さんは金儲けが人生の目的ではなく、それぞれが人間らしい生活をする手段であると語られた。そして、食べ物を商品にしなくても心豊かに出来ると言われた。このことに非常に意味があると思われた。

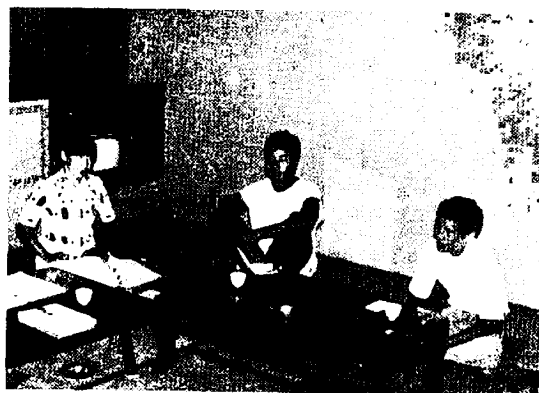
転換期を迎えて～現代の原子力について～

甲南大学 理学部 四回生 川野 三佐子

太平洋戦争末期の1954年8月6日、アメリカで完成したばかりの原子爆弾が広島に投下された。ついで、同年8月9日、2発目の原子爆弾が長崎に投下された。ものすごい高熱、爆風、放射能が一瞬にして町を破壊し、無数の住民の生命を奪った。それ以来、地球は異常な放射能のために汚染されてきた。核実験はたとえ地下で行われても、砂漠で行われても、地球上に蓄積される放射能は確実に増大するのである。そして、今もなお、白血病などで日夜苦しみ、悲惨な死に向かって闘いを続けている人々が大勢いる。私達はこれらのことを決して忘れてはならない。

原子力の研究も核分裂の発見までは、科学者達の知的好奇心で進められたと言えるだろう。しかし、時代の流れは、原子力を政治と結び付け、軍事目的として実用面に登場させてしまった。そして、今日では少なくとも4万ないし5万の核兵器が存在し、その爆発力の合計は広島型原爆の100万発分に相当すると言われている。この結果私達を待ち受けているものは、当然、永続的な平和ではなく、一層深まる全面核戦争の危機ではないだろうか。しかも、ひとたび核戦争になれば、誰かが生き残れるというものではなく、生命の存在そのものが根底から脅かされる事態に陥ることは十分考えられることである。つまり、今日の世界戦争に「勝者」はいないと言ってよい。この事実のもとでは、武力によらない紛争の解決、そして核軍縮から始めて、全面的な軍備縮小に進む以外に活路はないと思われる。そして先日、広島市で行われた核戦争防止国際医師会議(IPPNW)の第9回世界大会で採択された広島・長崎アピールのように、今や私達は核廃絶への処方せんを実際にうちだしていかなければならない。また、被爆国・日本の国民として、原爆の被害の人的悲慘について訴え続けていかなければならないだろう。

原子核反応を人為的に制御し、その反応から得られるエネルギーである原子力エネルギーは、原爆から始まり、原子力潜水艦、原子力発



農業の未来を語る

電へと応用された。中でも、原子力発電は他と違い「核の平和利用」として期待され、1956年にはイギリスのコールダーホール発電所で世界最初の商業的原子力発電が行われた。我が国でも1966年7月に茨城県東海村に「原子の火」がともされて以来、既に36基もが運転中である。しかし、アメリカのスリーマイル島原発事故やチェルノブイリ原発事故を含めた数々の事故、放射能廃棄物の処理対策、環境汚染など様々な問題を考え合わせると、「核の平和利用」では決してなく、広瀬隆氏が考えているように、「無用の原子力産業」と言わざるをえなくなってしまうだろう。

1950年頃から「石油は有限だ、だから次のエネルギー源の開発を」と叫ばれている。しかし、最も重要な課題は、日本や欧米のような大量消費社会の体質を変えることではないだろうか。例えば、アメリカの乗用車は大きく、1台当たりの石油消費量が他の国々の2倍以上になっているということが挙げられる。また、容易に手で洗える皿をわざわざ食器洗浄器にかけたり、住宅内で夏も冬も同じ服装で通すことを理想としたり、至る所に電気照明を備え付けるといった状態に陥っているとと言えるだろう。物質生活の向上はよいことかもしれないが、なぜ人々はこの様な愚かな物質生活に追いつき、追い越さなければならぬのであろうか。それがエネルギー政策の目標で、そのためにどうしても原子力発電所を必要としなければならないのであれば、それは二重にばかげた行為であらう。

現代は転換期であると言われる。それは、今までになかった問題や課題が現れたため、これまでの政治・文化が反省を余儀なくされ、新しい課題を新しい方法で解決することが求められている時代になっている、ということを表しているのではないだろうか。第二次世界大戦後、世界は資本主義国と社会主義国、先進国と発展途上国という二つの対立を軸に激動を続け、平和の達成、人口・食糧問題、資源エネルギー問題、公害・環境問題、人権の保障という大きく分けて五つの人類的課題に直面するようになった。これらはいずれも人類全体で取り組まなければ解決しない問題であり、世界の在り方の転換を迫っていると思われる。そして、現在、人間文化は種としての人類の滅亡をも覚悟しなければならないところまで来てしまっている。この様な状況で、私達は人間として学ぶべき事実を冷静に、しかも正確に知らなければならない。そして、追求しなければならないのである。今こそ行動する時が来ているのではないだろうか。

『危険な話』『ヒロシマノート』を読んで

甲南大学 文学部 三回生 村嶋 務

この二冊の本を読んで、僕はあらためて原子力とか放射能といわれるものを考えなおさねばならないと思いました。『危険な話』には、数多くの具体例や数字が記載されており非常にインパクトの強い内容になっています。

原子力発電は今や、テレビで大々的にコマーシャルし、日常的な発電方法として認識されてしまっていますが、その認識は大きな過ちです。第一、現在原子力発電に頼る必要は全くなく、十分火力発電で需要量はまかなえるそうです。一度でチェルノブイリやスリーマイル島、あるいはソビエトのウクライナのある地方全体が抹消されたといわれるような事故が起これば狭い日本は死の島と化します。では何故、どこにメリットがあつて電力会社は原子力発電を手掛けようとするのか、電力会社の収入は投資した8%以上もうけてはならないという規定があります。ですから、一基5000億円という原子炉を作れば、その8%分もうけていい訳です。安い火力発電所を作るよりもたくさんさんの収入があるのが理解できます。これが放射能と無関係なものであれば、「ボロい商売してやがるなあ」ぐらいですむ話なのですが、事は深刻です。人間が作った機械に故障はつきものであるし、自動車のように大量生産され、単純な機構のものでもたまにはブレーキが効かなくなったりします。原子力発電所には事故はないと言いきれぬ訳はありません。そして事故が起これば、それは目に見えないところで確実に私達に返ってきます。緊急炉心冷却装置などもチェルノブイリの例ではまったく用を為さなかったそうです。

放射能の危険についてメキシコでの具体例があるので紹介します。5キュリーのコバルト60のまわりで家族四人が生活した場合、16日目息子入院。17日目からおばあちゃん同居。25日目息子の左足壊死。29日目息子10歳死亡。108日目母親入院親とおばあちゃん入院。156日目



原爆の図：1

父親退院。195日目おばあちゃん57歳死亡。父親消息不明。

わずか5キュリーの放射線でこれだけの被害がでます。もっとたくさん人のいる所に放射性物質をおけばさらに大きな被害がでたでしょう。チェルノブイリでは10億キュリーもの放射性物質が出たといわれます。事故から少したちましたから、もう昔のことだと僕も思っていました。しかし、放射性物質は水俣の有機水銀のように食物濃縮で集められ、私達の体のなかへ入ってきます。そして内側から破壊していくのです。

放射線も少しずつ減少していきます。半分に放射線が減少するまでの期間を半減期といいますが、ウラン233で16万2千年、プルトニウム239で2万4千年です。これらの物質を放出してしまったら最後、永久的な放射能汚染の原因を作ったと考えられます。何とかしなければ人間はこの先、地上に住めなくなってしまうのではないのでしょうか。僕には原子力というものが人間の手に負えるものではないという気がしてなりません。自らの分を知り潔く手を引くことが大切であると思います。原子爆弾など作ってどうしようというのでしょうか。大江健三郎氏は『ヒロシマノート』の中で被曝者を「むなしく白血病で死ぬ苦痛と恐怖とをなにか意味あるものに昇華するには自分のケロイドこそが核兵器の全廃のために本質的な価値を持つと信じることのほかにないはずではないか」と分析しておられます。僕はこの文章を読んで胸がつまりました。原子力は用いるべきではありません。

毎日の日常生活で原子力問題について考えている人は特殊かもしれませんが。しかし私達一般市民も、もっと感覚を鋭くして、決して濁った目や、鈍い目で見ず、研ぎ澄ました刃のように原子力を見ていく必要があると思います。

過ぎた夏に

甲南大学 文学部 三回生 平岡 未央

1989年8月。その時、薄暗い丸木美術館からまばゆいばかりの夏の日差しの中に、一歩足を踏み出した私は、一瞬、軽い目眩を覚えた。これは、ただ単に美術館が自家発電の照明であり、なおかつ屋内から太陽の下に出たからというばかりではなかった様な気がする。

私は小学生の頃、広島原爆資料館を訪れたことがある。当時、そこで見た展示物は怖かったが、それよりも、一瞬の光線によってその様な状況にしてしまうというその光線の方が怖かった。それから幾年も過ぎ、私の当時の記憶も不確かなものになっていた今、また目の前にその現実をつきつけられたのだった。

私がそうであるからこう言う訳ではないのだが、人はできるだけイ

やなことは忘れよう、又、避けようとするものだと思う。その日、その日が楽しければ、それでいい。電気も水も、湯水のごとく使い、それらは、まさに、あって当たり前の感覚なのである。だから当然、自分が今、使用している電気がどこでどのように起こされ、水がどこから引かれているのかなど、考えはしない。恥ずかしながら私は、今回の合宿の参考文献『危険な話』（広瀬隆）を読むまで、日本全国に原子力発電所が何基あるのか知らなかったし、知ろうともしていなかった。だが、もし、私が原子力発電所の近くに住んでいたら、こんなこととはとても言えないはずだ。丸木御夫妻が、原子力発電の電気の不使用を唱え、電気を止められているという話を聞いた時、私は、自分はなんて事なかれ主義で、利己的な人間なのだろうと思ってしまった。現代は豊かな時代と言われて久しいが、いわゆる、「いい服を着て、いいものを食べ、楽をすること」が、そういうことなのだろうか。ここで曲者なのは「いいもの」という概念だと思う。例えば、形の整った果物や野菜、色のきれいな飲物、お菓子、発芽しないイモ等。これらが、実は、残留農薬、着色料等の合成物質の「よくないもの」の結晶だったりする。

私たちは、そういうものを見て見ぬふりをして暮らしていると思う。丸木御夫妻の様に電気を止められたら、と言う以前に電気なくしてはとて生活していけないと思うし、汚染された食物だってやはり、目をつぶって食べざるを得ないと思うてしまうのである。

環境汚染や食品汚染、公害輸出などを、まき起こしながらも、やはり便利さを求め続ける私達の素朴な因果律の連鎖は、たった一人が抗ってみたところで、どうにもならない巨大なものだと思う。私は学生という立場上、社会から一歩ずれた所に置かれているのだが、それにしてもいずれは社会に出る訳である。この社会は、良くも悪くも大



原爆の図：2

きな渦の様なもの、あらゆる物を巻き込んでいる。利益の陰に潜む、矛盾や人間のどろどろした暗い部分等。私も社会に出るとその渦中の一員となる訳だ。今までのように、暗いどろどろしたイヤな部分を避けてばかりはられないはずである。

ところで、今にして思えば、丸木美術館の絵は、どんな言葉や形容詞でも表せない、一種独特のオーラとでも言うべきものを発していたようだ。美術館で私は、本当にどうしたらいいのかわからず、いたたまれなかった。

この夏合宿では、普段の私自身の内に潜む問題がクローズアップされ、自分のイヤな所ばかりに目が行ってしまった。

相変わらず、私は以前同様の生活にすっかり浸っているのだが、この夏、自分の無力さや小ささを感じ、もどかしく思ったその記憶は、いつか私の糧になるものだと思っている。

生命の事実を知ること～丸木美術館を訪れて～

甲南大学 文学部 二回生 井垣 博美

今回の合宿で私が一番衝撃を受けたのは、やはり丸木美術館の絵だったと思う。原爆の図だけでなく沖縄戦の図も、南京大虐殺の図も、等身大近く描かれた人々と黒い墨に重ねられた血と炎の赤が戦争の恐ろしさ、原爆の惨さ、人間の奥底にある性を私にまざまざと見せつけていた。私たちが訪れる三か月程前から、美術館は反原発を訴えて原発稼働量分の電気料金の支払いを拒否したために送電を差し止められ、館内の照明は自家発電だけに頼っていた。そのような事情の中でこれらの絵を見ていると、原発反対のための単なるデモンストレーションではなく、料金を支払うことで暗黙に原発を認めるのを避けるために



石川理事長のお話

そうせざるを得なかった想いが伝わってくる。

また、これらの絵には、私たち日本人がなるべく目をそらし、隠蔽しようとしている事実が浮き彫りにされていたように思う。沖繩戦を、南京大虐殺を、朝鮮侵略や強制連行を知らなかったわけではない。それなのにこれらの絵を目の当たりにすると、自分が単なる史実上の言葉として以外何も解っていなかったこと、何も知らされていなかったのだということを痛感し、知ろうともしなかった主体性のない自分を思い知らされるのである。実際、私は沖繩で日本兵が住民を殺していたことや、日本人の、朝鮮人や中国人への差別や虐待がどんなものであったかということも、南京大虐殺で日本兵が何をしてきたかも、このとき初めて知ったのだった。

幼児が虫や小動物を弄ぶがごとき残虐さで人を殺す南京大虐殺の図の日本兵に「どうしても黒い目を入れることができなかった。」と言われた俊先生の言葉から、人が、人を一個の人間として見なくなる時、人の人間として生きる権利を奪う時、その人こそが人間ではなくなってしまうのではないだろうか、そんな考えが頭の中を過る。南京大虐殺の図の日本兵はまさに“人でなし”だったのだろう。けれどもそれが本当にその人個人の意思によるものだったのか。確かに虐殺や強姦は強制されたわけではないだろう。しかし、軍国教育、国粹的思想の強要、報道操作によって個を否定され、常に死と隣合わせの極限状態に措かれては、いったい何を個人の意思というのだろうか。無論、日本兵の非を否定するつもりも、戦争という時代に総てを責任転嫁するつもりもないが、この日本人もやはり国や軍という実体のないものによって人間であることを、人として生きる権利を奪われていたのではなかったのだろうか。

私はこの状態が現代にもどこか重なるところがあるように思う。現在、日本では人権も思想、報道の自由も保障されているかのように見える。しかし、少なくとも経済を中心に考えるならば、企業にとって



丸木伊里・俊両先生のお話を伺う

の人間は“生産者”“消費者”という経済効率を考えるうえでの数量化された存在でしかなく、その企業を構成する人ですら無限に増大しようとする企業の利潤追及のための駒として人間性は奪われ、生の営みとしての労働はもはや無く、労働の喜びや生きがいを失っている。そして、自由なはずの個人の思想も、過大な情報……その情報の媒体が意図を持ち得る人間であることに気付かず、商品としての、また利益を得るための手段としての情報に偏向され、画一化されている。このように、無限に利益を追及する経済機構の中で、人間の、ましてや自然の持つ生命が冒し難いものであることが無視され、人間性が失われているからこそ、自然破壊や環境汚染、食品汚染が行われ得るのではないだろうか。

原爆の図に描かれている、抱き合う姉妹や乳飲み児を抱えた母親の絵は私に生命の重さを教えてくれ、何十本もの足が幾重にも突き出た屍の山や石ころのようにごろごろと転がる髑髏の群は人の命がどれほど軽くなるかを胸に焼きつける。時代が、人が、生命というものを重くも軽くもするのである。かけがえのないはずの友人の命も肉親の命も自分自身の命すら、時には芥子粒ほどの重みもなくなってしまい得る。しかし、生命の価値、人として生きることの価値は時代や人に左右されるような相対的なものではないはずだし、そうあってはならないことをこれらの絵は語っているのだと思う。

この命の大切さを、そしてどんな生き物にも生命があるのだということを手でなく、心で理解するためにも、私たちは過去を忘れてはならないと思う。それは自分たちが受けた傷と同様に自分たちが与えた傷の深さを知り、真実を受け入れる勇気を持つ必要があるだろう。ある報道番組の特集で知ったのだが、韓国では小学校から高校までの教科書に、日本では数行で終わっている日本の侵略の歴史が数頁に互って書かれていたり、日本の侵略の有様を伝えるために拷問や虐殺の様子を人形を使って見せる史料館もあるそうだ。そして、韓国にお



ける日本についてのインタビューの回答はその殆どが老若男女を問わず“決して好きとは言えない国”なのである。これほどまでに深い傷を与えながら、私たち日本人は謝罪も補償もしないまま、この事実を過去へ葬り去ろうというのだろうか。過去の事実を目を瞑り、真実を知ろうともしないのは日本人が犯してきた行為を黙認するのも同じことだと私は思う。

美術館の中で、私は逃げ出したい気持ちに駆られながらも目をそらすことすらできず、胸が締めつけられるような、それでいて呆然とならざるを得ない、一度は耐え切れずに座り込んでしまったほどのそんな重圧感を感じながらこれらの絵に見入っていた。小さな照明の少し暗い館内に静かにたたずむ絵には、広島で、沖縄で、南京で死んでいった人々の魂が、それともそれは丸木御夫妻の筆に託された情念だったのか、そこに描かれている一人一人の中で今もお苦しみを続けているような気がして、何か怨霊めいたものを感じずにはいられなかった。

集合が掛かって美術館を出た時、私は少し奇妙な感じを受けた。私が出たのは最後の方だったのでゼミ生の殆どは外で全員が出てくるのを待っていたのだが、外は話し声ひとつなく、辺りに響き渡る蝉時雨が一層その静けさを増していたのだった。一つの言葉も浮かばず、声を出そうという気すら起きなかったあの時、私もまた皆と同じ途方に暮れた顔をしていたに違いない。

にんじんとトマト

甲南大学 文学部 二回生 北村光子

環境問題に取り組み、有機農場を営まれている金子さんと、絵画を通して、戦争の恐ろしさを伝え続けておられる丸木さんとは、広く未来を見つめているという点で共通したものがあると思う。

合宿初日、霜里農場を訪れ、土に触れて農作業を体験し、日本の農業や農場の経営についてのお話を伺った。まず感じたのは、金子さんをはじめ農場の皆さんの日に焼けた顔が、生き生きと輝いていたことだ。私たちも束の間だったけれど、農作業に没頭していたとき、とても生き生きとしていたように思う。にんじんを大きく育てるために、草を抜き、間引きし、立派なトマトを育てるために、虫を取る。せめてこの小さなにんじんが一人前に収穫されるまで見届けたいと思ったりした。よく冷えたトマトもいいけれど、もぎたての、太陽と土の匂いのしみこんだ温かいトマトを丸かじりするのは格別のものだった。

有機農法は、化学肥料に頼らないために、堆肥づくりなどたいへん

な作業が少なくない。また、農業を用いないため、除草や虫取りなど、一つ一つの作物に多くの手間がかかる。しかし、そのことによってこそ、流通に乗る企画された商品としての価値より、人間が食べる食品としての価値を重視した作物づくり、安全でおいしい本来の姿を持った食物づくりができる。それだけに、労働から得られる喜びも大きいと思う。

都市と農村が離れて存在している今日、土に触れてものを育てたり収穫したりするなかで喜びを得る機会に、私たちはあまり恵まれていない。が、今回、そういった体験を通して身につくもの、言葉でうまく表せないのだけど、その人その人の人間性にプラスされる強さのよくなるもの大切さを感じることができた。また、私たちの生活の根源となる食物、それを支える農業の重要性を見つめ直すことになったと思う。都市の人達に、特にこれからの時代を担う子供達に土に触れる機会を、学校教育や地域社会を通して与えていくことが私たちの未来を考える上で必要ではないかと思う。

それと同時に、私たち一人一人が、食物の色や形の美しさだけに動かされない確かな目を持ち、消費者として安全な食物を選択することで、私たちのニーズを示していかなければならない。また、消費者が主役になれる社会をつくるのもひとつの手だと思う。

あくる日、丸木美術館を訪れ、戦争や原爆を描いた数多くの絵を見た。その中で、今も目に焼き付いて離れない絵がある。南京大虐殺の絵のひとつ。そこには、とても人間とは思えない男の姿が描かれていた。俊先生が「どうしても目を描けなかった。」と言われる、その男の表情のない表情には、人を思いやる気持ちも、人間性のかけらも感じられなかった。私は何も言えずただ見続けているだけだった。その絵に、人間が人間でなくなる時を見たように思う。

平和というものは、今の日本では、ただで手に入るもののように思



われていることが多いが、いつでも、その反対のものと隣合わせの状態にあるのではないだろうか。今の状態に安住し、油断していれば、いつ反対側に転んでも不思議ではない。実際、目を向けて見ると、周りの食物も、空気も、水も、エネルギーも、私たちの生活を支えるほとんど全てのもものが、危険づくめであることに気づく。

原子力発電もそのひとつである。チェルノブイリなど一連の事故の後しばらくは、誰もがその危険性に目を向けたと思うが、またすぐに、日常生活に飲み込まれて忘れていく。しかし、今現在も、私たちが快適に暮らしている一方で、私たちと同じように、生きる権利をもっているはずの人たちが、原発の下請け労働者として放射線障害の危険にさらされ、命さえ脅かされている事実も軽視してはいけない。そして、私たちが原子力発電に頼るかぎり、自分たちにもその危険性がつきまわっていることを決して忘れてはならないと思う。

私たちが回してしまった便利さの歯車を、速めるのも、立ち止まって見つめ直そうとするのも、私たち自身だということを忘れたくない。



ゼミ合宿運営後記

甲南大学 文学部 三回生 阿部 哲也

本年度の夏合宿は平成元年8月21日～24日の3泊4日の日程で行われました。訪問先は、有機農業を営む金子美登氏の霜里農園と、「原爆の図」で知られる丸木位里・俊さんの丸木美術館であり、我々一行20名は埼玉県へ赴いたのであります。

出発の日、集合はJR新大阪駅でした。定刻午前8時に遅れたゼミ生はいなかったのですが、集合地点に多少の勘違いがあり、構内で互いをさがしあったりして少しはらはらしたものでした。新幹線が出発し15分後、京都駅で京都組と合流し、いよいよ始まった、そんな感じがしました。さすがにまだ皆元気で、意味もなく車内を歩き回る者、いきなり駅弁を開ける者などさながら修学旅行気分でした。東京駅、池袋と乗り継ぎ、東武東上線で一路埼玉は小川駅へと旅路をたどりました。時刻は2時。一旦旅館（廊下のよくきしむ、年期の入った、食事のそれはそれはおいしい居心地抜群のところ）でチェックインし、霜里農場へ向かいました。バス停から農園まで徒歩15分と聞いていたのですが、炎天下のせいか意外に道程は長く感じられ、途中のスーパーで休憩、そこで食べたアイスクリームに満足するHさんの顔が印象的でした。

霜里農園に着いて、金子氏より農園を一通り見せてもらいました。うさぎやヒヨコを見て女性陣が目細めているのは納得のいく光景なのですが、農村育ちでそんなもの今更珍しくもないはずのH、Iさん（失礼）もいっしょになって喜んでいるのは少し不思議でした。そして我々は数班に分かれて農作業を手伝わせてもらいました。トマト、人参畑の手入れ、堆肥づくりと皆それぞれに活躍、あるいは足手まどいになりながら農園のひと時を過ごしました。中でも堆肥づくりの作業でKさんが牛糞運びを自らかって出た、その旺盛な好奇心は感動モノだったと皆で感心していました。また、非力のあまりナタで薪を割ることのできなかったことが我ながら情けないというT、M君、がんばれ！君はまだ一年生だ。その後、もぎたてのトマトをみんなで頂いたのでありますが、顔ほどの大きさのトマトを大事そうに食べていたのはNさんでした。

旅館に戻り、夕食、あわただしい入浴の後、金子氏の講演が始まりました。有機農業、環境問題など、大変な熱演をして頂き、終わってみると、午前2時を過ぎていました。金子さん、本当にありがとうございました。

二日目、午前中は和紙工房を訪れ、それぞれ和紙のハガキ、しおりづくりを体験しました。お見せできなくて残念ですがそれぞれの個性がよく表れ、特にEさんの作品は、誰が見ても彼のものであることが分かる一品でした。草でつくる模様の代わりに自分の名前を堂々と

織ってあるのですから。午後からは丸木美術館を訪れました。館内見学をする一行は言葉も出ない、という感じでした。その日の晩は旅館で卒業論文の中間発表があったのですが、そろそろ皆に疲れが見え出したのか、あちらこちらでうつらうつら……。(発表者の皆さんゴメンなさい。)中にはHさんのように目を開けたまま顔をひきつらせて寝ていた人(?)もいました。ただしその後のコンパでは、何故か皆再び元気になっていたのです。

三日目は朝から、丸木御夫妻の講演を聞きに再び丸木美術館へ向かいました。原子力発電反対のお話の最中、その抗争相手である東京電力の人達が現れ、ただならぬ雰囲気となったのですが、ビデオカメラを回し続けていたAさんのカメラマン・シップは立派だと思いました。お話も終わり、最後に俊先生が、昔農民一揆の合図に作られたという桐でできた笛を披露して下さいました。「誰か吹いてご覧になりますか」、という呼びかけに、真っ先に手を上げたM. Aさん、おもむろに笛を手にとりあれこれ思案したあげく一声、「うー!」、「それは声やねえか!」と心の内でつつこみを入れたのは、顔を見合わせた僕とM. M君だけではなかったと思います。

そして午後からは自由行動となり、再び霜里農園を訪れる者、プールに行く者、植物公園へ行く者、旅館で一休みする者などそれぞれグループに分かれて行動しました。

四日目は朝から自由行動となり、午後4時に池袋に集合するまでそれぞれ好きに過ごしました。神田の古本屋へ赴く先生、東京見物をする者、時間いっぱい旅館で過ごす者、再びプールを目指す者。睡眠不足、気疲れ、歩き疲れ、働き疲れ、遊び疲れと皆それぞれ重い足どりで夏合宿の最後の一時を過ごしました。Aさんと共にビデオ係を務めてくれたK君、プールで最後のエネルギーを使い果たし、帰りの電車でTさんの胸にもたれかかり、子供のように寝入る君の姿は、後々までもゼミの語り草となることでしょう。

夕日に照らされ走る帰りの新幹線では、さすがに皆ぐったりしていました。そんな時でもまだ写真を撮って歩いていたカメラマンのT. T君、G. M君、本当に御苦労さまでした。また幹事のTさん、会計のMさんを初め最初から最後まで運営のため奔走して下さいました。どうもありがとうございました。

京都駅で京都組と別れ、新大阪駅での恒例の三本締めとともに89年度の夏合宿の幕となりました。時刻は午後8時をまわっていました。

運営委員：辻 啓之
阿部 哲也
上田 雅美
井垣 博美

